

* 0 0 5 8 2 5 2 0 0 0 *

3

0058252-000

特 2 2 5 - 7 4 7

孫子の兵学

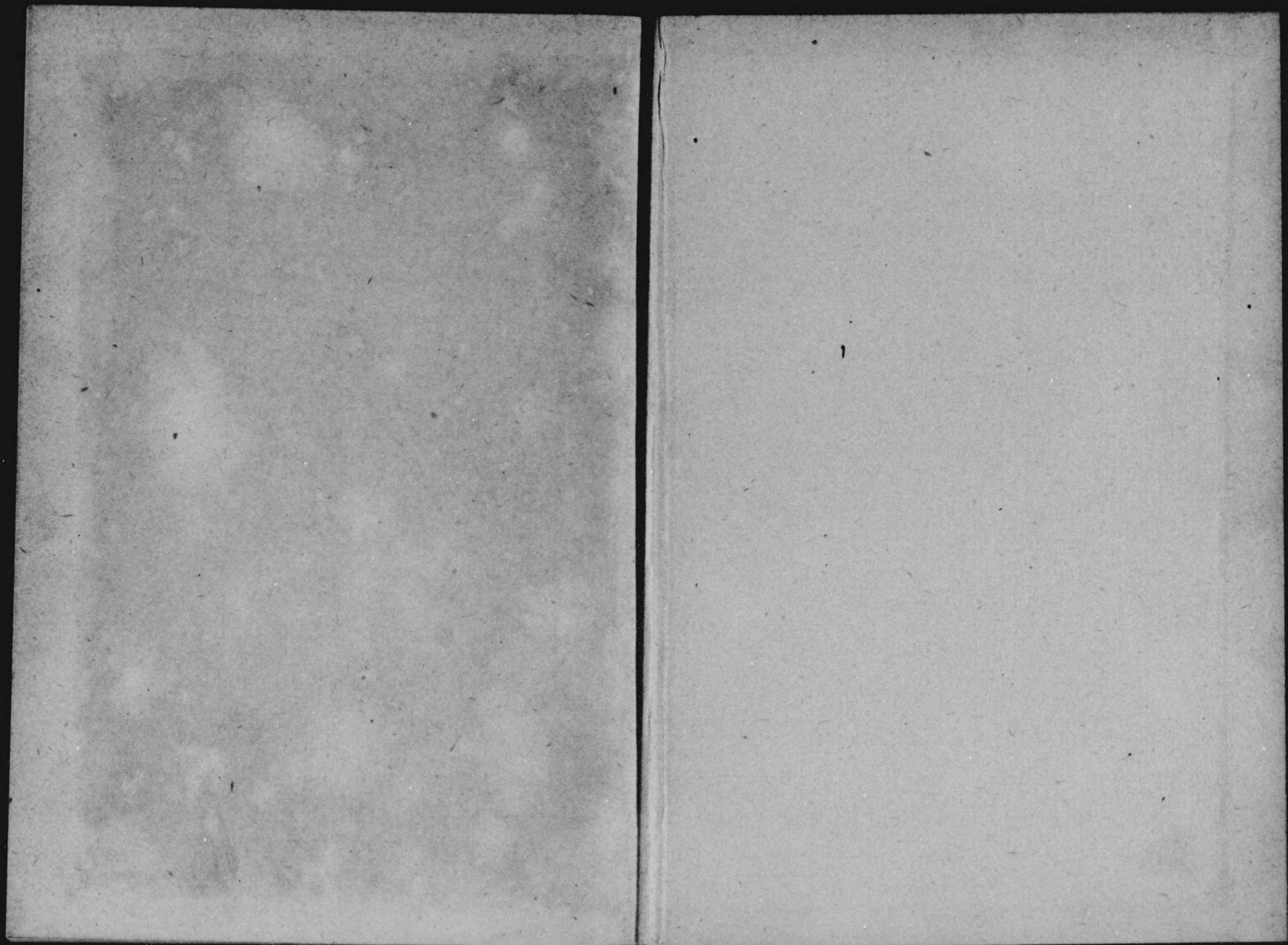
友田口剛・著

国民教育普及会

昭和 1 6

AJI

この著作物は、著作権者不明のため、著作
第 6 7 条の規定に基づき、平成 1 2 年 5 月
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するも



特 225
747



元陸軍教授 友田宜剛著

孫子の兵學

東京 國民教育普及會發兌



はしがき

世界は今や戦場である。前線統後の別は殆ど無い。何人たりとも、戦術は一通り學んでおかななくてはならぬ。この意味に於て「孫子」の一讀をお勧めしたい。

今の戦は、單に武力戦のみで勝を制し得べきものでない。武力戦そのものに於ても、謂はゆる科學戰で、卓越なる科學の力が忠誠勇武の軍人諸君によつて發揮せられなくてはならぬのであるが、更に思想戰あり、經濟戰あり、外交戰あり、宣傳戰あり、文化戰等々がある。此等の總ての戰に於て優勢なるものにして、始めて眞の勝利を占め得るものである。而して此等諸戰術の原理の一斑を學ぶ意味に於て「孫子」を一讀乃至數讀することをお勧めしたい。

我等日本臣民は、あくまでも平和を愛好するものである。決して好戰國民ではない。併しながら、平和を愛好すればこそ、總ての戰に於て優勢者であらねばならぬ。總ての戰に優勢にして、こゝに始めて我が國家の大理想たる八紘一宇、東亞新秩序の建設、延いては全人類の福祉をも齎し得るのである。戰鬪劣勢の者にして、何が大々的平和を招來し得ようぞ。この意味に於て、我等日本臣民は、誰しも諸戰術の一斑は心得ておかななくてはならず、この意味に於て「孫子」の精讀をお勧めしたのである。

「孫子」は兵書の第一である。而して之を精讀することによつて、單に武力戰に於ける戰術原理を知り得るのみでなく、思想經濟外交宣傳文化等の總ての戰に於ける戰術原理をも類推し得

るものたることが首肯される。私がこの書を著はすに至つた動機は、軍人方のお勤めに基因してゐる。具體的に言へば、平素敬愛せる將校から、「孫子」は是非士官學校生徒に讀ませてほしいと奨励されたことから筆を起したもので、苦心一年有半の産物である。

元來「孫子」は、古書であるだけに、わかりにくい所が多く、諸説紛々、調べれば調べるほど一層わからなくなるやうなふしがないではない。僭越ながら、それら諸説の、穩かなるを採り、粹なるを抜き、聊か私見をも加へて、而も極めて簡潔を旨とし、御多忙の讀者諸君に、手つとりばやく會得されることを旨とした。不備の點は御諒恕を請ひ、且つ御示教を請ふ。

昔、頼山陽先生は「孫子」の愛讀者であつたといふ。滿天下の賢明なる現代人士諸君も、必ずや之が愛讀者とならるゝことを信じて疑はぬ。このごろ特に深く感ずる所あり、敢て本書をも動員して、臣道實踐、職域奉公の一端を履行せしめる次第である。

落花の續紛たるを眺めつ
無住老人 友田 宜剛 するす
時に頽齡七十四歲

孫子次の兵學

始計第一	一	一六三
作戰第二	一一	一六五
謀攻第三	二二	一六七
軍形第四	三二	一七〇
兵勢第五	四二	一七一
虛實第六	五一	一七四
軍爭第七	六五	一七七
九變第八	七六	一八〇
行軍第九	八五	一八一

本文頁

原文譯文對照

目次

行軍	本文頁	原文譯文對照
地形第十	一〇三	一八五
九地第十一	一一五	一八九
軍火第十二	一四四	一九五
用間第十三	一五一	一九七
軍運第十四	三二	一三〇
軍火第十五	二二	一六三
軍火第十六	二二	一六五
軍火第十七	二二	一六三

目次

孫子の兵學の源流

孫子の兵學

孫子は古來兵書の第一と稱せられてゐる。その説く所、哲理を含み、機微の妙を穿つて

る。必ずしも兵戰運用の上とのみはぬ。勝を折衝の間に制せんとする者には、一讀大に悟入する所あらしめる。況して武人に於ては尙更である。孫子の作者は孫子である。孫子、名は武、支那戰國時代の齊の人である。伍子胥の薦めによつて吳王闔廬に仕へ。上將軍となつた。楚國と戦ひ、楚軍を破り、大いに威武を天下に發揚した。その人の頭腦から結晶して成つた此の書、單に机上の空論とけなし去るべきものではない。

孫子十三篇、いろいろ異説はあるが、この十三篇だけはたしかに孫子の脳細胞から反映したものである。

始計第一

は、賢能に委任すること。法とは、節制嚴明なること。と張預が註してゐる。これが五つの計量器のやうなもので、その各説明は次の如くである。

道者令民與上同意也。故可與之死。可與之生。而民不畏危。

「恩信道義を以て衆を撫すれば、則ち三軍一心、上の用を爲さんことを樂ふ、易に曰く、悦んで以て難を犯し、民其の死を忘る。」と、張預が註してゐる。尤もである。民とは必ずしも人民とのみ見るべきでは無い。上として、團體の長として、その部下の衆は皆民と見てよい。さすれば今の軍隊にも實によくあてはまる。上たり長たる人が、よく下に對して恩あり信あり、道義に立脚して之を愛撫すれば、部下の衆は皆此の長にこそ死なめと、いのちをおし出して敢て畏れも危ぶみもしないのである。これでこそ上下共に死生を俱にし得るのである。眞に貴ぶべきではあるまいか。此の點の優れる者が勝を占むることは疑なき事實である。

天者、陰陽・寒暑・時制也。

天とは、陰陽五行に關係したることゝか、風雨寒暑に關係したることゝか、春夏秋冬四季に關係

五行は、木火土金水をいふ。

この事は後九地篇に説いてある。

地者、遠近・險易・廣狹・死生也。

したことなどをいふ。此等も亦考慮の内に入れなければ軍の勝敗は期せられぬものである。中につき、陰陽五行の説の如きは今日殆ど論すべき價值も無からうが、それでも巧みに利用して以て士氣を勵まし勝を制する助にならないとも限らぬ。日に向つて弓を引くは畏れ多いと言つたが、理論上から考へても不利な状況たることはわかる。拂曉戦を利とし、夜襲が奇功を奏するなども時の制に關したものであるまいか。或は濃霧に乗じ、或は結氷萬里の酷暑を利し、或は高粱茂る盛暑を選ぶ等も、皆この項に屬すべき問題であらう。

これは地の利に於て彼我の優劣如何と計るのであるが、畏くも、神功皇后が近き熊襲をさしおいて遠く海を渡らせ給うた如きは遠近といふ例に當り、源義經が鴨越を下した如きは險の例に當る。易は平地。甲越兩軍が川中島に戦つた如きがそれである。廣きは滿洲の曠野に戦ひ、狹きは市街戦に於て見る。死生とは、到底死を免れぬ地と、又、生を全うし得る地とをいふ。されど、死地必ずしも死地でなく、生地必ずしも生地とは限らぬ。要は運用の妙に存する。が、併しあらかじめ彼我の地の利に於て計る所は固より無くてならぬ。

將者、智・信・仁・勇・嚴也。

これは兵に將たる者の徳目五つを挙げたのである。將たる者は、智あり、信あり、仁あり、勇あつて、而も嚴なる所がなくならぬ。將克く此の五徳を備へる者は勝ち、備へざる者は負ける。先づ此の點に於て計る所が無くてはならぬ。先王の道は仁を以て首と爲すも、兵家者流は智を以て先と爲す。蓋し、智なれば能く機權にして變通を知るなり。信なれば人をしめて刑賞に惑はざらしむ。仁なれば人を愛し物を憫み勤勞を知る。勇なれば勝を決し勢に乗じて遠巡せず。嚴なれば威刑を以て三軍を肅す。と杜牧は言つてゐる。

法者曲制・官道・主用也。

法とは法令制度、きまり、おきて等の義であるが、之を分つて言へば、その主なるものが曲制・官道・主用である。さて、曲とは部曲の義で、隊伍編成の法を謂ひ、制とは旨と軍律を意味する。官とは各司々の官職、例へば中隊長・大隊長・聯隊長といふの類、道とは各職分に應じて盡すべきの道を謂ふ。主とは概して經理の職掌、用とは兵器糧食等を謂ふ。これには尙

官道の道に
ついでには
權路なりと
か行軍及
び會する所
もありふ説
も官道の二
字についで
に校首長が

統率多す道
あるなりと
いふ説もあ
る。

索其情は、
情實の
なる所を
探するこ

種々の異説もあるが、先づこれ位にとどめて、さて、此等の諸點についても彼我の優劣を比較し考慮をめぐらすことが大切である。

凡此五者、將莫不聞、知之者勝、不知者不勝。

五つとは、上述の道・天・地・將・法。凡そ此の五つのもの、苟も兵に將たる者の關り知らぬ筈は無い。されど、その知り方に淺深がある。深く之を知る將は勝ち、知らない者は勝つわけにゆかぬ。

故校之以計、而索其情。曰主孰有道、將孰有能、天地孰得、法令孰行、兵衆孰強、士卒孰練、賞罰孰明、吾以此知勝負矣。

であるから、先づ彼我兩方を校へ計るに、此等の標準即ち計量器を以てして、さうして其の實情のたしかな所を計算し定めるのである。くはしく言へば、彼我二國の主たる者、どちらが忠信の道あるか、その將たる者、どちらが智・信・仁・勇・嚴を備へて能力卓越してゐるか、天・時

きのみ。」と張預は言つてゐる。又蒯生祖德は、之を通俗的に解して、「權はハカリのおもりだ。左右へ移し様々に變じ易へて宜しきに叶ふのだ。制は制作の義で、こちらから出し、しかけることだ。それ兵の勢は、天より降るのでもない、地より湧くのでもない、將の掌に握り全き勝を爲すものゆる制といふのだ」といふ意味の事を述べてゐる。

兵者詭道也。能而示之不能、用而示之不用、近而示之遠、遠而示之近、利而誘之、亂而取之、實而備之、強而避之、怒而撓之、卑而驕之、佚而勞之、親而離之、攻其無備、出其不意。此兵家之勝、不可先傳也。

元來、兵戰は詭道である。詭とは、いつはるのである、あざむくのである、敵をして煙にまかしめるのである、神變不思議、はかり知ることが出来なくさせるのである。兵に常形といふものは無い。故に兵を動かすには詭詐を厭はぬ。權變自在である。兵を用ひることは仁義

之其は敵を指す代名詞
最後の此は上文を指す代名詞

に本づかなければならぬけれども、必勝の術は詭詐權謀に出づることを妨げぬ。寧ろ當然とする。故に我軍、實は力餘りあつても敵には、とても叶はぬかのやうに見せかけ、或は武器に戰術に、實は大いに用ひる所あつても、まるで何等も用ひぬかのやうに見せかけ、或は近きを撃つに志あつても、わざと、遠きを改めるかの如く、或は遠きに志あつても、わざと、近きを撃つかの如くに見せかけ、或は敵に利益を啗はして、それでおびきよせることもすれば、或は敵の備へをかき亂して取ることもする。或は又、敵の防備が充實してゐたら、我も亦之に十分の備を爲して敵の變を待ち、或は敵が頑強に過ぎたらば、一時その銳鋒を避けるやうなこともする。或はわざと激怒して敵を凹ますこともやれば、わざと卑下して敵を驕慢ならしめることもやる。或は又、敵が休養し安逸にして力に餘裕があるやうであつたら、何等かの手段を講じて之を疲勞せしめ、或は敵の君臣上下の間が親密であつたら、何とかして之が離間策をも行ふ。凡そ此等の種々なる方法を以て敵を不利に陥れ、我を有利に導き、敵の備へなき所を攻撃し、敵に不意討をくらはせる。これが謂はゆる詭道、勢の乗する所で、これこそ兵家の勝つ所以。あらかじめ口もて傳授せられる所のものではない。

夫未戰而廟算勝者、得算多也。未戰而廟算不勝者、得算少也。多算勝、少算不勝、而況於無算乎。吾以此觀之、勝負見矣。

前段既に兵勢詭道を説き了つたので、復び始計の説に反つて此の一篇を結んだのである。夫れ兵は重事である。故に之を動かすの前先づ祖先の廟堂に重臣を會して、前述、計の諸項について之が勝負の如何を進議計算する。之を廟算といふ。算木を用ひ、敵に幾つ味方に幾つと算へて、その多數を得たるを勝とし、その少數を負とする。まして無算の方はなほ負である。我この方法によつて之を観察するに、勝敗の決は未だ戦はざるに自ら知悉せられるといふのである。

作戰第二

先づ計つて、それから作戰に及ぶ、これがいくさの順序である。「計以て勝を知り、然る

馳車は戦車なり攻車なりがなりとの註
杜牧曰く、軍に諸侯交聘の禮あり、故に賓客と曰く、賓客預り、日く、使客命り、遊士を命り

後に戦を興す云々。と王哲は言つた。

孫子曰、凡用兵之法、馳車千駟、革車千乘、帶甲十萬、千里饋糧、則内外之費、賓客之用、膠漆之材、車甲之奉、日費千金。然後、十萬之師舉矣。

馳車は戦車。と言つても、今の戦車ではない。併し軍の主兵として戦線に出て大いに活動したものと見える。駟とは馬四頭に牽かせること。千駟とは、千車。一車に七十五人。革車とは輻重車。革で包装したものらしい。一乗は一車、二十五人、各、千車で總計十萬人となる。甲冑を帶する故に帶甲といふ。その大勢に對して糧食糧秣を千里の遠きに輸送するといふことになると、なか／＼大變なさわざである。之に關する内や外やの費用は大したもの。それに又、諸國から來る觀戰の客やら使節やらに要する費用といひ、弓箭その他の武器に用ひる膠漆などの材料といひ、車輛や甲冑やと、軍の奉仕に無くてはならぬものゝ費用といひ、毎日莫大な金錢を費して、さてこそ十萬の大軍をも動かし得るのである。

暴師
軍隊を千里
の外にさす
めさらすこ

以上は、兵を動かすことの容易でないことを説いた。

其用戰也、勝久則鈍兵、挫銳、攻城則力屈、久暴師、則國用不足。

さていよいよ戦争といふ段になつて、勝つには勝つたが非常に長時日を要したといふことになると、士氣も鈍れば鋭鋒も挫ける、城も攻め陥しはしたが我が力は屈したといふことになり、そのうへ、いつまでも長く敵地に軍隊をさらし出しておくと、國家の費用はとても足りない。以上は戰の長時日に互る損失を述べたのである。

夫鈍兵挫銳、屈力殫貨、則諸侯乘其弊而起。雖有智者、不能善其後矣。故兵聞拙速、未睹巧之久也。

「夫れ」と言葉の端を改めて、前段の意を短く繰り返して、其の害の及ぶ所を説いた。即ち長時日の戰鬪によつて、我が軍の士氣鈍り、鋭氣挫け、力盡き、金錢財貨の缺乏を訴へることに

なると、かねて我が隙を狙つてゐた隣國どもは、我が此の疲弊につけこんで起つてくる。さうなると、どんな智者でも其の善後策をうまくやつてのけるといふことは出来ない。だから、凡そ兵の運用は、拙でも迅速なのがよい、巧妙でも長時日に互つては駄目である。といふのである。

夫兵久而國利者、未之有也。

重ねて深く、誡めたのである。杜佑が「兵は凶器なり、久しければ則ち變を生ず。」と言ひ、李筌が春秋の語を引いて、「兵は猶ほ火のごとし、戢めずば將に自ら焚かんとす。」と言つたのは、ちよつと面白い。

故不盡知用兵之害者、則不能盡知用兵之利也。

久戰の不利なことは既に述べた通りであるが、總じて、ものには利害必ず相伴ふ。兵を用ひる上についても、その害を十分に知り盡さないやうでは、其の利をも亦十分に知り盡されな

らず。」と杜佑は言つた。「害とは人を勞し財を費すことなり、利とは敵を呑み境を拓くことなり。苟も己が患を顧みずば、舟中の人悉く敵國たり、安んぞ能く利を敵に取らんや」と杜牧は言つた。

善用兵者、役不再籍、糧不三載。取用於國、因糧於敵。故軍食可足也。

善く兵を用ふるの將、即ち連戰、功を收むるの將は、民を從軍せしめるに、二度までも召集するやうなことはせぬ。糧食の如きも、出征の初一度は車に載せ運び、凱旋の時また糧を載せて迎へるが、其の他は總て敵地の物を取る。三度も載糧の煩を爲すことは無い。兵器用具の類は總て自國の物を持ち行くのであるが、糧は敵地の物を取つて補給しゆくのである。

「役」とは民を召集して從軍させること。「籍」とは點呼名簿の類に姓名を書きつけること。「用」とは兵器戦具をいふ。

國之貧於師者、遠輸。遠輸則百姓貧。

貴賣は、物をたかく賣ること。

近於師者貴賣。貴賣則百姓財竭。財竭則急於丘役。

國が軍事のために貧しくなるといふは、糧食を遠くに運ぶからである。糧を遠くに運べば、一般人民殊に農民は貧しくなる。孟氏曰ふ、「兵車千里の外に轉運すれば、財は則ち道路に費え、人に困窮する者あり。」と。張預は曰ふ、「七十萬家の力を以て、十萬の師に千里の外に供す。則ち百姓貧しからざるを得ず。」と。管子に曰ふ、「粟三百里を行けば、國に一年の積なし。粟四百里を行けば、國に二年の積なし。粟五百里を行けば、衆に飢色あり。」と。

既に出征した。軍の所在地近くでは物價が非常に騰貴する。騰貴すれば自然と影響して、自國一般人民の財力は涸渴してくる。財力が涸渴してくると、おかみへ出すべき賦役も困難になつてくる。

「丘役」とは井田法によつて出すべき賦役。徂徠の國字解によると、「周の司馬の法に、民の家一戸で百畝の田を耕し、九戸で田九百畝を一井と名づけ、一井を四つ合せたのが一邑、一邑を又四つ合せたのが一丘、一丘を又四つ合せたのが一甸。此の一甸よりの賦役が、軍馬四匹牛十六匹、軍車一輛、武者七十五人を仕立て、出す。之を丘甸の役ともいひ、又丘役ともい

と裏切策を行はせるからである。(かくして久戦に互ることなく、敏速に戦勝を収めるのである。)

以上は徂徠の説によつた。別に、「敵を取るの利は貨なり」と讀んで、敵の貨を以て我が兵に賞與するの名によつて我が軍を勵まし敵を取るといふ義に見る人も多い。杜牧は、曰ふ、「士をして敵を取るの利を見しむるものは貨財なり。謂へらく敵の貨財を得ば、必ず以て之を賞し、人をして皆欲あり各自に戦を爲さしむ云々。」と。張預は曰ふ、「貨を以て士に啗はし、人をして自ら戦を爲さしむ、則ち敵の利取るべし。故に曰く、重賞の下必ず勇夫あり。」と。皆後説に屬してゐる。

故車戰、得車十乘已上、賞其先得者、而更其旌旗、車雜而乘之、卒善而養之。是謂勝敵而益強。

それで、車戰について一例を擧げるならば、假に敵の戰車十乘以上を得たとすると、其の先づ降參して我に得られた敵を賞して他の敵にも降心を起させ、さうして、その旗じるしは我が旗じるしに取りかへ、其の車は我が兵車に雜へて用ひ、(降參した士卒をも我が士卒に雜へ

て乗らせ)その士卒は善く撫養して我が用を爲さしめる。これでこそ敵に勝つて益、我が強さを増大したといふことになる。

以上が徂徠の説。之を他説では、「先づ得られたる者を賞し」と讀まずに、「先づ得たる者を賞し」と讀み、敵車十乘以上といへば、之を取つた我が兵も多いから悉く賞するわけにゆかないので、先登第一に取り得た者を殊勳者として賞して他の者を激勵させる。といふ意味に解してゐる。

ついでに一言しておくが、支那の昔の戦法は、車戰・騎戰・徒戰とあつて、車は車を奪ひ、騎は騎を奪ひ、歩は歩を奪ふといふことに定まつて居ることは、吳起が秦人と戦つた時に三軍に令して、「若し、車、車を得ず、騎、騎を得ず、徒、徒を得ずば、軍を破ると雖も皆功無し。」と言つたのにもわかる。さうして、車戰に於ては、一戰について甲士三人歩卒七十二人、合せて七十五人、之を一乗となしたらしい。

故兵貴勝、不貴久。故知兵之將、民之司命、國家安危之主也。

これは此の一篇の結びである。戰爭に勝つことは貴ぶ、併し久戦に互ることは貴ばない。そ

れで、實によく兵の運用利害の理を知り盡してゐる將は、民の司命と仰ぐ所であり、國家安危の主體たる者である。

司命とは、天の文昌星中の一星である。人の吉凶禍福を司る故に人の仰望する所である。單に生命を司ると文字通りに解してもよからう。

將たる者の大任について、試みに諸家の言を掲げよう。

曹操曰く、「將賢なれば則ち國安し。」

李筌曰く、「將、殺伐の權威あり、敵を却けんと欲す。人命の繫る所、國家の安危此に在り。」

杜牧曰く、「民の性命、國家の安危、皆將に由るなり。」

王皙曰く、「將賢なれば民その生に保んじて國家安し。否れば則ち民毒殺せられて國家危し。明君の任屬、精ならざるべけんや。」

何氏曰く、「民の性命、國の治亂、將に主たり。將の任難し。古今患ふる所なり。」

張預曰く、「民の死生、國の安危、將の賢否に繫れり。」

謀攻第三

計議は已に定まつた。戦具は已に集まつた。さてこそ智をもて攻を謀るべしである。故に作戰篇の次に之を置いたのである。

孫子曰、凡用兵之法、全國爲上、破國次之。全軍爲上、破軍次之。全旅爲上、破旅次之。全卒爲上、破卒次之。全伍爲上、破伍次之。是故、百戰百勝、非善之善者也。不戰而屈人之兵、善之善者也。

戰爭の目的は殺戮にあるのでは無い。だから用兵の法としては、策略威徳、以て敵國をして風を望んで來り降らしめ、一兵に血ぬらずして完全に其の國を我に服せしめるのが最上策であり、激烈な戦闘により其の國土人民を傷つけ破るといふことは下策である。軍・旅・卒・伍、

夫將者國之輔也。輔周則國必強、輔隙則國必弱。

いつたい將といふ者は、國家に取つての輔佐官である。將たる者が、注意周密、水も漏らさぬ謀をする人であれば、その國は必ず強く、將の心が隙だらけであつては、その國は必ず弱い。

眞に、尤もな説である。國の強弱は必ず將に在り。將は君を輔け、而して才その國に周なれば則ち強く、君を輔けず、内その貳(一心)を懷けば則ち弱し。人を擇び任を授くること、慎まざるべからず。と賈林は言つてゐる。

故君之所_ニ以_テ患_ニ於_レ軍_者三_不知_レ軍_之不_可以_テ進_而謂_之進_不知_レ軍_之不_可以_テ退_而謂_之退_是謂_之糜_軍。

如上の次第であるから、人君たる者が軍に迷惑を與へるものが三つある。その一つは、進んではならぬことも知らずに進むがよいと仰せられたり、退いてならぬことも知らずに退くがよいと仰せられたりするの、これは糜軍といつて、一ばん困ることである。糜はツナ

これを以て將に任するに其人を以てせざるなり。義に就いた人もある。

グと訓み、御なり、絆なりと註せられてある。駕御糜料、將に一任せずして、内から拘制することである。

不知_レ三_軍之_事而_同三_軍之_政者_則軍_士惑_矣。

その二、これは軍の總大將の外、更に君が近侍の臣を監軍として差遣するの弊をいふ。監軍は固より三軍の事を知らぬ。而して總大將と等しなみに軍政に關與するといふのでは、軍士はどちらの爲すことがよいのかわからぬといふやうな事が起つてくる。總大將の威令行はれず、軍に失敗を招くは必定である。(これは主として徂徠の説に據つた。)

不知_レ三_軍之_權而_同三_軍之_任則_軍士_疑矣。

その三、三軍の權とは如何なるものかをも知らずして、みだりに三軍の大任を同じくする者があつてまぜかへすと、軍士は疑心を生じて適從する所を知らぬ。將、軍に在つて、權、專制ならず、任、自由ならずば、三軍の士自然に疑はん。と陳暉は言つた。

「政や權や、知らざる者をして之を同じうせしめば、則ち動くに違異あり、必ず相牽制せん。是れ則ち軍衆疑惑せん。裴度が奏して監軍を去り蔡州を平けし所以なり。此れ皆、君上専ら賢將に任する能はず。則ち之を同じうせしむ。故に通じて之を三患と謂ふ。」と王哲は言つた。「軍吏中、兵家の權謀を知らざるの人あり。而して同じく將帥の任に居らしむ。則ち政令一ならず、而して軍疑ふ。邲の戦に、中軍の帥荀林父は還さんと欲し、裨將光穀従はず、楚に敗らる、是れなり。近世、中官を以て軍を監せしむ。その患正に此の如し。高崇文蜀を伐ちしとき、因て之を罷め、遂に能く功を成す。」と張預は言つた。

三軍既惑且疑、則諸侯之難至矣。是謂亂軍引勝。

三軍既に疑惑を懐くやうになると、かねて隙を狙つてゐた隣國諸侯の難が勃發してくるだらう。これこそ我軍を亂して敵に勝利を奪ひ去られるといふものである。

故知勝有五。知可以戰、與不可以戰者勝。識衆寡之用者勝。上下同欲者勝。以虞待不虞者勝。將能而君不御者勝。此五者

知勝之道也。

こんな次第であるから、勝を知るに五つの要項がある。即ち、戦ふべきか戦ふべからざるかのけじめを知る者は勝つ。衆寡如何によつて之が巧妙なる運用法を識る者は勝つ。上も下も一心同體その希望を同じうしてゐる者は勝つ。虞といつて、我は警戒準備おさく、怠りなく、以て敵の油断を待つて乗ずる者は勝つ。將がいかにも立派な器量あるもので、君これに一任し少しも制御がましいことをしないものは勝つ。この五つのは勝を知るの道である。「上下同欲」について張預は、「百將一心、三軍同力、人人戦はんと欲すれば則ち向ふ所前なし。」と言つた。

故曰、知彼知己、百戰不殆。不知彼、而知己、一勝一負。不知彼、不知己、每戰必敗。

綜合して本篇の結びとした。實に至言である。即ち、彼我の情勢を審かに知悉すれば百度戦つて百度とも負けることはない。彼敵のことをばよくは知らないけれども、味方の情勢だけ

はたしかによくわかつてあるとすれば、一度は勝つて一度は負けるといふ程度のものである。彼をも知らず我をも知らぬといふのでは、それこそは狂氣の沙汰で、戦ふたびにきつと負ける。

軍形 第四

形は外に見えるもの、軍の動きのさまが、あり／＼と見え、こまに、見えざる内情を察し、はたしてこそ勝を制すべきである。謀淺きものは形あらはにして見やすく、謀深きものは形かくれて見がたし。形を察して其の情を取るときは、敵に勝つこと掌に握るが如し。と祖徠は言つた。善く兵を用ふる者は、能く其の形を變化し、敵に因て以て勝を制す。と王哲は言つた。謀攻は勝を未戦に制するの道。既に戦ふに及んでは形を知り勢を知らねばならぬ。謀攻篇に次いで軍形・兵勢の二篇を説いた所以である。單に「形篇」とした本もある。

孫子曰、昔之善戰者、先爲不可勝、以待敵之可勝。不可勝在己、可勝在敵。

昔のよく戦つた名將は、第一に我が軍については注意周密、一つも抜け目の無いやうに構へて、如何にしても敵が我に勝つことの出来ないやうにし、さうして敵方に對しては、必ず我が軍が勝ち得べき機會の到るのを待つてゐる、即ち戰機の熟するのを待つてゐる。(決して無理なことはしない)さて、どうあつても敵が我が軍に勝つことの出来ないやうにといふことは、我が軍自己が爲すべきことである。(だから、此の點には、萬、遺算なきを期して、而も深く禱して我が形を敵に知られないやうにせねばならぬ。)我が軍が必ず勝ち得べき機會、敵の隙を捕へるといふことは、彼れ敵に對しての事に在るのだ。(故に、むやみにあせつてもしやうが無い。只じいつと隱忍して待つべきである。)

「敵を制することは我に在り。故に自ら修理し、以て敵の虚懈を待つ。已に敵に關漏の形あるを見、然る後勝つべし。」と杜佑は言つた。

故善戰者、能爲不可勝、不能使敵必可勝。

であるから、よく戦ふ名將は、敵がどうあつても我には勝てぬといふ方面、即ち自己に屬した方は完全に能くやるが、敵どもに、貴様たち俺等の勝てるやうにしろと要求することは断じて出来ないのである。

故曰、勝可知、而不可爲。

我に勝つべき要件は皆備はつてゐるからして、これならきつと勝つといふことはわかるが、さればとて敵に乗すべき隙が必ず生ずるとは限らぬ故に、勝つとは知つても事實必ず勝を取るとは限られない。(とは言へ、謀を以て、勝を事實に爲すの工夫は常に運らしてゐなければならぬ。)

不可勝者、守也。

敵がどうしても我に勝てないといふのは、我よく形を藏して、十分備へて守る所があるから

である。即ち軍法の「守」といふことになる。之を張預は、「己未だ以て勝つべからざるを知らば、則ち其の氣を守りて之を待つ。」と言つた。亦一説である。但しこの説に従へば「守也」を「守る」と讀むべきである。

可勝者攻也。

さていよく機に乗じて敵に勝つことの出来るのは、我よく攻勢に出たからである。即ち軍法の「攻」といふことになる。

以上の二句を杜牧が、「敵に未だ勝つべからざる時は我守るべし。敵に勝つべき所ある時は我攻むべし」といふ意味に説いたのは、おもしろいが、前との關係上如何であらう。

守則不足、攻則有餘。

之について張預が、「吾が守る所以の者は、勝を取るの道足らざる所あるを謂ふ、故に且く之を待つ。吾が攻むる所以の者は、敵に勝つ事己に其の餘りあるを謂ふ、故に出でて之を撃つ。言ふこゝろは、百勝に非ざれば戦はず、萬全に非ざれば闘はざるなり。後人、足らざる

「九天」は最も高い天、最も深い地の底の義。

を弱と爲し。餘りあるを強しと爲すといふは非なり。と言つたのは面白いと思はれる。
善守者藏於九地之下、善攻者動於九天之上。故能自保而全勝也。

守勢の地に立つて能く守る者は、我が行動總てを大地のどんぞこに秘して、決して敵に窺はしめない。さて攻勢に立つた場合は、天の天外にまでも大活躍を演じて、迅雷霹靂、應接に逸なからしめる。だから能く吾が萬全を保して全勝を得るのである。
見勝不過衆人之所知、非善之善者也。戰勝而天下曰善、非善之善者也。

勝の機先を見るのが、普通の人と格別すぐれた點の無いのは最善なものではない。又戰勝つたといふので始めて天下の人が讚美するのは、是れ亦最善なものでは無い。最善なものといへば、必ずや衆人に超越して、勝を未萌に見るの明があり、未だ戰はずして人の兵を屈せしめるの腕が無くてはならぬ。(前段、善守善攻の將のみ能く之を爲すことであらう)

杜牧曰く、未萌に勝ち、天に知らず、故に其名なし。

故舉秋毫不爲多力、見日月不爲明、聞雷霆不爲聰耳。古之所謂善戰者、勝易勝者也。故善戰者之勝也、無智名、無勇功。故其戰勝不忒。

動物の秋細くなつた毛を一本舉げたからとて、力持だとはしない。日月を見得たからとてあかるい目だとはいはれない。雷鳴を聞き得たからとて耳さといとはいはれない。それと同じやうに、古へのいはゆる善く戰ふ名將が勝つといふのは、勝ち易いのに勝つのである。だから、勝つたとて別段智勇すぐれた功名が赫々と世に知られるでもない。(併し、それが眞に貴いので、名將は決して無理をしない、自然と勝てるやうな状況に進めて行つて、さていよいよこれで大丈夫勝てるといふ時になつて之に一撃を加へるまでである。故に我に損傷少なくして、而も敵は懸落に落ちてしまふのである。)だから戰勝、少しも手ちがひの起ることはないのである。

不忒者、其所措必勝。勝已敗者也。

上述の如く戦勝志はずといふ名將は、其の措置する所がいつでも必ず勝つのである。それは、未だ戦はざるの前已に敗れてゐるも同然な敵に勝つのである。(だから勝つことに間違ひが無い。)「蓋し先づ敵人の已敗の形を見、然る後に之を攻む。故に能く必勝の功を制して志はざるなり。」と杜牧は言つた。

故善戦者、立於不败之地、而不失敵之敗也

即ち、自分はどうしても負けないといふ地位に立つて、さうして、いつも敵の隙を窺つて其の敗れるべき機会を取りはづさないのである。

是故、勝兵先勝而後求戰、敗兵先戰而後求勝

かういふ次第であるから、我が日本軍の如き常勝軍は、必ず先づ勝算が立つて、それから戦闘機会を求めらるのであるし、支那兵の如き常敗軍は、これだけの兵があるからまあぶつかつて見ようといふ位な調子で戦つて、それから、さてどうしたら勝つだらうかと勝を求めるのである。(常勝軍と常敗軍とはこれだけの差があるのである。それといふのが、畢竟、彼

梅堯臣曰く
勝つべくし
て戦ふ戦へ
つば則ち勝
つべきを未だ
得ずして見
得べきけん

我の形情を知ると知らないのどに基因するのである。

善用兵者、修道而保法、故能為勝敗之政

いかにも、道を修め法を保つといふことは大切である。さて其の修道保法を種々に解釋して、李筌は、「順を以て逆を討ち、無罪の國を伐たず、軍至りて虜掠なく、樹木を伐り井竈を汚さず、過ぐる所の山川城社陵祠必ず濼いで之を除き、亡國の事に習はず、之を道法といふなり。軍嚴肅、死ありて犯す無く、賞罰信義。將此の若くなる者は能く敵の敗政に勝つ。」と説いて居り、杜牧は、「道とは仁義なり、法とは法制なり。善く兵を用ふる者は、先づ仁義を修理し、法制を保守し、自ら勝つべからざるの政を爲し、敵の敗るべきの隙を伺ふ。則ち攻めて能く之に勝つ。」と説き、賈林は、「常に兵を用ふるの勝道を修め、賞罰の法度を保つ。此の如くなれば則ち當に勝を爲すべし。能はざれば則ち敗る。故に勝敗の政と曰ふ。」と説いて居り、張預は「戦を爲すの道を修治し、敵を制するの法を保守す。故に能く必ず勝つ。」と言ひ、更に別の説を引いて、「或は曰く、先づ道義を修飾し以て其の衆を和し、後法令を保守し以て其の下を戦め、民をして愛して之を畏れしめ、然る後に能く勝敗を爲す。」と言つて居る。玩味し

てみる必要があらう。

兵法、一曰度、二曰量、三曰數、四曰稱、五曰勝。

これは孫子が古の軍書の語を引いたものと見える。

度とは土地を度る丈尺。量とは辨目のことだともいへば、人力の多少や倉廩の虚實を量るのだともいふ。數とは、算數。數を以て之を推せば、衆寡知るべく、虚實見るべし。と賈林は言つたが、凡そ數字上に關した總てを謂ふと見てよからう。稱とは權衡、輕重をはかるもの。彼我の德業の輕重、才能の長短を知るのだと賈林は言つた。勝とは即ち勝つこと。勝敗の政、用兵の法、當に此の五事を以て稱量して敵の情を知るべし。と曹操は言つた。

地生、度、度、生、量、量、生、數、數、生、稱、稱、生、勝。

凡そ戰陣は地を離れては出來ないが、さて其の地あれば、こゝに丈尺を度るといふことが生じて、城を築くにしても、陣立をするにしても、行軍するにしても、何につけても土地廣狹遠近を度るといふことが生じてくる。さて又、その土地を度つたことからして、その地積に

張預曰く、
此の兵が制
るの兵が制
なるの兵が
對する兵が
重ひさしを
ふらざるを
ふらざるを

は如何に經營したらよいか、如何に人數を配置したらよいか、又敵方について見ても、あの地質ならばどういふ場合になつてゐるだらうかといふやうに、すべて其の地について戰陣に必要なことを辨目で量るやうなことが生じてくる。さて又さうなると、すべてそれが數字になつてあらはれてくる。さて又さうなつてくる時、彼我の狀況優劣強弱が權衡にかけたやうにわかつてくる。さうなると勝は自らに生じてくるものである。

以上が古の兵書の藉であらう。

故勝兵若以鎰稱銖、敗兵若以銖稱鎰。

秤の量目で、二十四銖が一兩、二十兩が一鎰といふのであるから、銖は至輕、鎰は至重。(諺にいふ提燈と鐘で)したとへば、勝つべき軍兵は一貫目の重さで一匁を量り比べるやうなもの、負くべき軍兵は一匁の重さで一貫目の物を量り比べるやうなもの。まるで釣合が取れぬ程の差である。(といふのが、つまり勝兵は外形内情共に充實し、敗兵は空虚であるからである。)

勝者之戰也、若決積水於千仞之谿、者形也。

軍 勢 第 五
兵 勢 第 五
孫 子 曰 凡 治 衆 如 治 寡 分 數 是 也

こゝに極大の筆を以て此の篇を結んだのである。勝者の戦はさながら洪水と洪水へた水を千仞の窟底へ切つて落しかけるやうなものだ。その優勢、當るべからずである。これが軍形といふものである。

兵 勢 第 五

陳、形を以て成れば、建、師を決するの勢の如し。故にこの篇を以て之に次ぐ。(李筌) 且「勢とは積勢の變なり。善く戦ふ者、能く勢に任せて以て勝を取る。力を勞せざるなり。」

右の諸説を以て本篇の解題に代へる。孫子曰凡治衆如治寡分數是也

孫子曰凡治衆如治寡分數是也

分とは組分、即ち隊伍を分つこと。數は人數、即ち各部隊や全隊の人數。多くの兵を治めること、さながら少數の兵を治める如くに旨くゆくのは、部隊を分ち人數を適當に按配して、之に規律的訓練を施すからである。善く兵を用ふる者、將一金を鳴らし一旌を擧げ、而して三軍盡く應ず。號令既に定まり、寡の如し」と李筌は言つた。

「衆兵既に衆くば、即ち須らく多く部伍を爲るべし。部伍の内、各小吏あり以て之に主たり。故に其の人數を分ち、之をして訓齊決斷せしめ、敵に遇ひ陳に臨み、授くるに方略を以てせば、則ち我これを統ぶること衆しと雖も、之を治むること益、寡」と陳皞は言つた。

闘 衆 如 闘 寡 形 名 是 也

「形」とは旌旗。「名」とは金鼓。さきの分數の法で百萬の衆をも一手に掌握することは出来るが、さて之を號令する段になると、聲や手まねで行き届くものには無い。由て、それなく目じるしになる旌旗を造り、金や太鼓で合圖をすれば、それで如何なる大軍をも手足を使ふやうに出来る。故に衆を闘はすこと寡を闘はすが如くなるといふのである。

形は陣形、名は旌旗、以て之を號令するに用ふるべし。衆兵既に衆くば、即ち須らく多く部伍を爲るべし。故に其の人數を分ち、之をして訓齊決斷せしめ、敵に遇ひ陳に臨み、授くるに方略を以てせば、則ち我これを統ぶること衆しと雖も、之を治むること益、寡」と陳皞は言つた。

「夫れ軍士既に衆ければ、分布必ず廣し。陣に臨み敵に對するも、遽に相知らず、故に旌旗の形を設けて、各をして之を認めしめ、進退遲速又相問えず、故に金鼓を設けて以て之を節し、之をして、鼓を聞かば進み、金を聞かば止れと曰ふ所以なり。」と陳皞は言つた。

「形を陣形だとする説もある。」

「三軍」は大軍、數字的に言へば三萬七千五百人、大國諸侯の軍。その大軍が各部隊毎に敵を受けて、而も少しも敗北ならしめるのは、兵の運用に奇正の二道あるからである。奇正の意義は一言では言へないが、先づ、正とは正々堂々たる正面衝突を謂ひ、奇とは變幻以て敵の不意に出るのを謂ふものと見てよからう。

兵之所加、如以礮投卵者、虚實是也。

「礮」は石。我が兵力の敵にのしかまつてゆく所、きながら石を卵に投げつける如く、雜作もなく破るのは、虚實といふことが然らしめるのである。石は實、卵は虚。我が軍は實、敵は

虚なのである。「夫れ軍を合せ衆を聚め、先づ分數を定む。分數明かにして然る後形名に習ふ。形名正しうして然る後奇正を分つ。奇正審かにして然る後虚實見るべし。四事次序せる所以なり。」と張預は言つた。

凡戰者、以正合、以奇勝。故善出奇者、無窮如天地、不竭如江河。

終而復始、日月是也。死而復生、四時是也。聲不過五、五聲之

變不可勝聽也。色不過五、五色之變、不可勝觀也。味不過

五、五味之變、不可勝嘗也。戰勢不過奇正、奇正之變、不可勝

窮也。奇正相生、如循環之無端、孰能窮之。

これからは、奇正の變について大いに説明を加へた。

總じて戦といふものは、先づ正道を以て彼我合戦し、さて奇道を用ひて勝を取るののである。それで、よく奇道奇策を出す者は、其の運用の妙の窮まりなきこと、さながら天地の窮まり

寸隙なく、敵これを敗ることが不可能なのである。

亂生於治、怯生於勇、弱生於強。

治・勇・強は喜ぶべく、亂・怯・弱は憂ふべきもの。而も、治を恃んで驕怠なれば亂これに由て生じ、勇を恃んで驕怠なれば怯懼これに由て生じ、強きを恃んで驕怠なれば、弱これに由て生ずる。軍の運用に於ても亦その通りである。而して、勢節宜しきを得れば固より此の憂は無い筈であるが、而も事實は往々此の弊に陥り易いから大いに戒慎しなければならぬ。

治亂數也、勇怯勢也、強弱形也。

數とは隊伍編制の法をいふ。それが旨く調つてゐれば其の軍隊はよく治まり、それが調つてゐなければ亂れる。故に治亂は數なりと言つたのである。又、勢ひに乗じて行動すれば怯者もおのづからに勇氣づき、之に反すれば勇者も怯懼に陥り易い。故に勇怯は勢なりと言つたのである。形とは状況行動等をいふ。我が軍の状況行動が敵に窺ひ知られぬは其の強き所以であり、之に反して其の一舉一動の形が見えすくのは弱いからである。故に強弱は形なりと

言つたのである。

故善動敵者、形之敵必從之、予之敵必取之。

我が軍が、わざと種々なる姿形をして見せて、敵が必ず之に従つて来るやうになり、我が軍が敵に有利と見ゆる状況を與へて、敵が必ず喜んで之を取る。斯くの如く、我が常に先手を取つて敵をこちらの思ふやうに引き廻せば必ず勝を得るものであるが、これは善く前述の、勢を知り形を知つて善く敵を動かす能力有る名將の始めて能くする所である。(碁や將棋に於て考へて見てもわかる。)

以利動之、以卒待之。

上述の如く、敵に有利らしい状況を予へて之を動かし、さて其の動くに乗じて撃つべく精兵精卒を以て之を待つのである。

故善戰者、求之於勢、不責之於人。

人とは、部下の衆を謂ふ。故に戦の上手なものは、以上述べた勢ひといふことに勝敗の原因を求めて、必ずしも部下の衆に責を負はせるやうなことはしない。

故能擇人而任勢

であるから、能く適材を適處に擇び用ひて、而してその勢ひに任じて活動するのである。

任勢者其戰人也。如轉木石之性、安則靜、危則動、方

則止、圓則行。

上述の如く、勢ひに任じて能く戦ふの名將は、その部下の衆をして、勢ひに乗つて戦はせること、喻へば木石をころがすやうである。といふわけは、木石の性質といふものは、平地に安定してゐれば靜かであるし、傾斜面などで危い處にあれば動くし、(これは場所についていふ)四角であれば止まつてゐるし、圓ければころがつて行く。(これは形についていふ)兵戦が勢ひに乗るのも全くこの通りである。

故善戰人之勢、如轉圓石於千仞之山者、勢也。

であるから、巧みに部下の衆を戦はせる勢ひ、さながら圓い石を千仞の山から轉がらせ落すやうであるのは、この勢ひといふものである。と、全篇を結んだのである。

虚實第六

虚とは内容がむなしいのである、實とは内容が充實してゐるのである。凡そ兵の運用には、奇正相生する所、こゝに虚實の變轉極まりなきものがある。我の實を以て敵の虚を撃つは固よりのこと。或は我の實なるを虚と見せ、或は虚なるを實と思はせることもあらう。或は敵の實を避けて虚を撃ち、或は敵の實なるを轉じて虚ならしむることもあらう。良將の巧妙なる手腕運用は、謂はゆる虚々實々神變不可思議なるものがある。此の篇、これを説いて盡してゐる。孫子十三篇中、最も重きを置かれたものである。

佚は力餘
りあるな

能く敵を
て来らしむ
れば則ち我
勞しければ
いば則ち我
佚すべし

孫子曰、凡先處戰地、而待敵者、佚、後處戰地、而趨戰者、勞。

凡そ戦闘の行はるべき地點に先づ行つて之に據り、以て敵の來るのを待つ者は我が力に餘裕が有り、後れて其處へ來て餘儀なくゆきがかりの戦をする者は骨が折れて力屈する。

故善戰者、致人、而不致於人。

人とは敵のこと。敵を我が方に引きつけるやうにこそすれ、決して敵に引きつけられるやうなことはせぬ。(これが虚實の眞理で、善く戦ふ者の爲す所である。)

能使敵人、自至者、利之也。能使敵人、不得至者、害之也。

さて其の敵を引きつけること巧みにして、敵が自然に其處へ來なければならぬやうにさせるのは、敵の利益になりさうなことを以て誘ふからである。又、その反對に、敵がどうしても其處へやつて來ることが出來ないやうにさせるのは、敵の不利有害になりさうなことをして牽制するからである。

故敵佚能勞之、飽能飢之、安能動之、出其所必趨、趨其所不意。

であるから、若し敵の力が餘りあれば、何等かの手段を以て之を奔命に勞れしめ、若し又敵が糧食に飽く程であれば、又何等かの方法を以て(糧道を絶つなども其の一つ)敵を飢えさせるやうに謀り、若し又敵が陣地を堅固に構へて安ければ、又何等かの行動を以て敵を動かし、之を不安の状況に陥れ、敵がどうしても行かねばならぬ所へ我軍も行き、さて又敵の思ひもかけぬ所へ行つたりもする。斯くて虚々實々敵を自由に取つて廻はすのである。(虚實の妙味こゝにあり、よく碁や將棋などでも此の理を見られる。)

行千里、而不勞者、行於無人之地也。攻而必取者、攻其所不守也。守而必固者、守其所不攻也。

敵地に進入すること千里なるも、而もさのみ苦勞でないのは、敵の虚にして備なく、さながら人無きの地を行くからである。又、攻むれば必ず取るといふのは、敵の守の成つて居らぬ

所、即ち虚なる所を攻めるからであり、又、我軍が城を守つて、必ず其の守りが堅固であるといふのは、我軍が用心厳しく水も漏さず、敵の攻めさうにもない所まで守るからである。(即ち守りが實なるからである)

故善攻者、敵不知其所守、善守者、敵不知其所攻

右のやうな次第であるから、よく攻める者に對しては、敵は、どこを守つてよいかかわからず、よく守る者に對しては、敵は、どこから攻めてよいかかわらないのである。

微乎微乎、至於無形、神乎神乎、至無聲、故能為敵之司命

これは上述の意を讚美したのである。微とは微妙不可思議といふ義、神とは人智の及ばざる所、即ち神妙不可思議の義。司命とは、人の吉凶禍福を司るといふ星の名。由て生殺與奪の權を握つて居る義となる。如上の如き兵の運用の極致は實に微妙神妙不可思議で、我が軍の動靜が少しも形なく聲なく、全く敵の窺ひ知る所でないといふことになる。であるから能く敵を向ふにまはして活殺自在の働きを爲すのである。

司命の説明は作戦篇の末尾に出ている。

進不可禦者、衝其虚也、退不可追者、速而不可及也

我が軍が進撃する時に當つて、敵が防禦しきれないのは、敵の虚隙を衝くからである。又我が軍が引きあける時に當つて、敵がそのあとを追ふことが出来ないのは、我が軍の行動が敏速で追つても追つつくことが出来ないからである。

故我欲戰、敵雖高壘深溝、不得與我戰者、攻其所必救

也、我不欲戰、雖畫地而守之、敵不得與我戰者、乖其所

之也

故に我が軍が若し攻勢を取つて敵と戦はうと思ふ場合には、敵がどんなに防禦工事を完全に施しても、それでも我が軍と戦はないでは居られない。といふのは、敵がどうでも捨てゝはおけぬといふ處を攻めるからである。又我が軍が守勢に立つて、今戦ひたく無いといふ場合には、何等防禦工事を施さず、只一線を地上に畫いただけで守つてゐても、それでも敵が我

進不可禦者、衝其虚也、退不可追者、速而不可及也

之也

が軍と戦ふことが出来ない、といふのは、敵の取らんとする行動に手ちがひを生ぜしめるからである。

故形人而我無形、則我專、而敵分。

人に形せしむとは、敵の陣形隊形一舉一動のすべてが悉く我に見え透くやうにすること、我れ形無しとは、我が軍のそれらすべてが少しも敵の窺ひ知る所とならぬこと。さうなれば我が軍は渾然たる一團となつて全力を向けんと欲する所に集注することが出来るし、之に反して、敵軍は力を幾つにも分たねばならぬことになる。(兵の運用の妙がそこにある)。

我專爲一敵分爲十、是以十攻其一也、則我衆而敵寡。

我が軍は渾然として有力な一聚團となり、敵は幾つにも分れて、その勢力が殺がれるといふことになれば、假に敵が十分されるとすると、我れの十の力を以て敵の一の力のものを攻めるといふことになるのである。この道理から推すと、假に彼我同兵數であるとしても、我れは衆にして敵は寡なりといふことになるのである。

衆は必す多し、寡は必す少し、此の理に基きたる衆を以て寡を撃つといふことである、吾が軍の共に戦ふ所、力を用ふることも少なくて功を成すことが多いのである。

能以衆擊寡、則吾之所與戰者約矣。

約とは少なき義。上述の理に基きたる衆を以て寡を撃つといふことである、吾が軍の共に戦ふ所、力を用ふることも少なくて功を成すことが多いのである。

吾所與戰之地不可知、不可知、則敵所備者多、敵所備者多、則吾所與戰者寡矣。

上文の意を具體的に戦地について言つて見るならば、吾が軍は運用の妙なる爲めに形が敵に窺はれないから、敵は吾が軍が何れの地で會戦しようとするのか、まるでわからない。それがわからないとすれば、敵は何れの地點へも兵を配つて備へなければならぬから、備へる場所が多くなる。それが多くなれば敵の勢力は幾つにも分たれるのであるから、吾が軍の與に接戦する所の敵兵は少數だといふことになる。(この理は將棋などにもよく見られる。上手な人のこまの動かし方がこれである)。

故備前則後寡、備後則前寡、備左則右寡、備右則左寡、無所

不備則無所不寡

これは上文の意を詳説したのである。即ち、敵は、吾が軍の形を窺ひ知ることが出来ないから、前方に備へをすれば後方が手薄となり、後方に備へをすれば前方が手薄となり、左方に備へをすれば右方が手薄となり、右方に備へをすれば左方が手薄となり、どこにもかにも備へをしなければならぬから、自然、どこもかも手薄くなつて寡兵の状態となるのである。

寡者備人者也。衆者使人備己者也。

人とは相手、即ち敵のこと。上述の如く、たとひ衆い兵でも寡き用をしか爲さないものは、相手に對してみだりに備へる立場のものであり、之に反して、寡ない兵でも衆い用を爲すのは、相手をして我に備へさせるといふ立場のものである。と上文をちよつと結んだのである。

故知戰之地、知戰之日、則可千里而會戰。

前であるから、兵の運用巧みなる者で、いつ何日頃何れの地で戦ふのであるといふことの豫測

杜佑曰く、敵先づ人なきに、皆先づ人なきに、備ふれば人なきに、りぞ。

が出来たものであれば、千里の遠き處に於てとも敵と會戦して克く勝を制し得るのである。
不知戰地、不知戰日、則左不能救右、右不能救左、前不能救後、後不能救前。而況遠者數十里、近者數里乎。

若し上述の反對で、戦地戦日を豫測も出来ぬといふ拙劣者であると、同じ味方の軍ながら、左が右をさへも救ふことができず、右が左を救ふことさへもできず、前が後を救ふことさへもできず、後が前を救ふことさへもできない。況して、遠くて數十里近くても數里と隔てたものをば猶更救ふことが出来ないのである。と、たとひ其の兵が衆くても用を爲さぬことを説いたのである。

以吾度之、越人之兵雖多、亦奚益於勝敗哉。故曰、勝可爲也。敵雖衆、可使無鬪。

縦横自在に説き進めて、こゝに至つて、吾が吳國の兵が必ず敵越國を破り得べきことを斷言したのである。「私、心に之を度りまするに、上述の如く掛引自在に兵を動かしますならば、

「吾」の字を「吳」の字に「吾」の字をあはせ、同義で、

いかに敵越國の兵は多いからとても、何等勝敗に益あることではございませぬ。勝つて御目にかけることは確かでございます。敵が衆いからとても、必ず戰國力を失はせることが出来
ます。

故、策之而知得失之計、

これからは、更に實行の手段を簡略に條陳したのである。之とは敵。策すとは帷幄の内にて敵をはかること。得失を知るとは、彼我の計の得失何如を知ること。即ち、未だ戦はざるの前先づ策して之を知るのである。

作之而知動靜之理、

之を作すとは敵を激作せしめるのである。敵を少しくこつついて見て、その動き工合を見るのである。

形之而知死生之地、

張頂曰く、死地は傾覆の地を謂ひ、生利の地を謂ふ。

之に形すとは、我が軍が敵に對して、わざと謀つて種々なる動きの形を詐り見せるのである。そして、それに敵が乗つてくるか來ないか、又その乗り工合の何如に由て敵の弱點死地が我れに知れて來るやうにするのである。

角之而知有餘不足之處、

角は觸れる義。敵に一當り當つて見て、敵が力餘りあつて強きか、將た足らずして弱きかといふことを知るのである。

故、形兵之極、至於無形、

兵を形するとは、上述の如く策・作・形・角の四手段を以て我が形をわざと拵へて見せて、その實、敵の形に探りを入れるのであるから、其の運用の極致を言へば謂はゆる無形といふ妙處に至るのである。(前文、微乎、至於無形といふ所に照應する)

無形則深間不能窺、智者不能謀、

梅、兵臣曰く、形あり、實あり、是を以て形なし、敵なり。

角は量なり、さといふ註もあつて、はかるべし。

勢といふも
こいでは形
さいふに同
じ。

五行とは木
火土金水。

くのである。

故兵無常勢、水無常形。能因敵變化而取勝者謂之神。

だから、兵の運用には一定の形といふものは無い。それは水に常形が無い如くである。とにかく敵の形次第で巧みに變化を極めて、目く勝を取つてゆく。それが謂はゆる神妙不可思議と讚美すべきものなのである。

故五行無常勝、四時無常位、日有短長、月有死生。

喩へば水は火に勝ち、火は金に勝ち、金は木に勝ち、木は土に勝ち、土は水に勝つ、といふ工合に、五行いづれも相勝つことは有るが、これのみ常に勝つといふことは無い如く、又、春去れば夏、夏去れば秋、秋去れば冬、冬去ればまた春といつても循環してゐて、一定位といふものは無い如く、又、日には長い時もあり短かい時もある如く、又、月には満ちたり缺けたりしていつも變化しゆく如く、兵の運用にも亦虚實相制して千變萬化極まりなきを貴ぶのである。と、妙味津津々以て此の篇を結んだのである。

張預曰く、
君命を受け
つて叛逆を伐
つたり。

軍争第七

兩軍相對して、戰を有利に導くべく相争ふのである。先づ彼我の虚實を知つて、さてこそ勝を争ふべきである。故に虚實篇に次いで此の篇を置いたのである。

孫子曰、凡用兵之法、將受命於君、合軍聚衆、交和而舍。莫難於軍争。

和とは軍門。交和とは軍門を相對せしめること、即ち彼我對陣すること。舍とは宿ること。凡そ兵を用ふるの法は、將たる者が君命を受けて軍を編制し、兵衆を聚め彼我相對して陣營に宿舍するのであるが、此の時に當り、何がむつかしいと言つても、軍争、即ち戰を有利に導くべき總ての事に於て敵と争ふことが一番むつかしいのである。

軍争之難者、以迂爲直、以患爲利。

一見迂遠と思はるゝ道を取るのが却つて直にして近いことゝなつたり、さては患難に陥るかと思はるゝ所に却つて利益なことがある。そこを旨く有利に有利にと導いてゆくのがむつかしいのである。

故迂^{ラニウシテ}其途^{ミチ}而誘^{オソ}之以利^リ、後^{ノチ}人發^{ヒキ}先^ニ人至^ル。此知^ル迂直之計^ノ者也

わざと我が行く道を迂遠な方に取つて、敵に有利なやうに見せかけて敵を誘つたり、或はわざと敵より後に出發して敵に油断を喰はせて敵より先に向ふへ到着する、といったやうなことが出来るのは、これ上文に述べた所の、迂を以て直と偽すの計を知つてゐる者である。

故軍争爲利、軍争爲危

こんな次第であるから、軍争といふものは、旨くゆけば有利なものとなり、下手をすれば實に危いことゝなる。

擧軍而争利則不及、委軍而争利則輜重捐

社佑曰く、
兩軍も争ふ所あり
取する所あり
則ち危なり
之を失へば利
れは則ち利
之を失へば
則ち危なり
曹操曰く、
選くして及
ばざるなり

全軍輜重までものこらず擧げて敵に趨いて利を争ふといふことになると、行動緩慢にして、とても追つゝくものでない。さればとて、輕騎ばかりを提げて、その餘はどうならうとも構はぬといふやうな行き方をして利を争ふことになると、輜重は委棄されてしまふといふやうな馬鹿を見ることになる。(そこの呼吸がむつかしいのである)

是故卷甲而趨、日夜不處倍道兼行、百里而争利、則擒

三將軍、勁者先、疲者後、其法十一而至、五十里而争利、則蹶

上將軍、其法半至、二十里而争利、則三分之二至、是故軍無輜

重則亡、無糧食則亡、無委積則亡、

これは、前文の、軍を委して利を争ふ場合の得失を述べたのである。甲を巻くとは鎧をたゝんで身輕になること。處らずとは、休息せぬこと。輜重とは兵糧や諸荷物のこと。委積とは同じく糧食薪糧などの積み蓄へ。だから、急ぎ先へ駆けつけて軍利を争はうといふ場合に於て、甲を脱いで疊んで身輕に

なつて走り、晝も夜も休息もしないで、普通の行軍の二倍もの道を行き、晝夜兼行といふ有様で、百里の遠き地點に達して利を争ふといふことになれば、若しそれが三軍の場合ならば三將共に敵に生擒せられ、強い者は先着するが、弱い疲勞者は後れがちで、其の法凡そ十分の一だけが達し得る。それが五十里位の距離である場合には、それほどの損失では無いが、でも先手の大將などは手痛い目に遭ひ、その兵數凡そ半分位が達し得る。それが二十里の場合であると、三分の二位が達し得ることであらう。それ故に、斯かる場合に軍を委棄して損失を構はず断行するといふことも餘程の考へもので、輻重糧食それらの蓄へが無いから軍の滅亡を招くといふやうなことになるのである。

故不知諸侯之謀者不能豫交

以下三項は、軍争の要道を説いた。即ち第一、軍争の要道としては、先づ、隣國諸侯などと豫め交はりを結んでおく必要があるが、それにしても、先づそれら諸侯の謀が那邊にあるかを知らないでは豫交を全うすることはできぬ。

張預曰く、先づ諸侯の實情を知り然る後以て交を結ぶべし。

不知山林險阻沮澤之形者不能行軍

第二、山や阪や水澤などの地形を知らないでは、軍を進めて利を争ふことはできぬ。

不用郷導者不能得地利

第三、郷導と言つて、その土地その土地の人を用ひて案内者とするのが大切で、これが無くては十分に地の利を得て軍争に勝つことはできぬ。

故兵以詐立以利動以分合爲變者也

こゝに上文を承けて、軍の運用全體を約言したのである。即ち用兵の術は、譎詐變幻極まりなきを根本義として立ち、有利な情況を、といふことに目をつけて活動し、人數を分けつ合せつしてそこに變化の妙を極めてゆくのである。

故其疾如風其徐如林侵掠如火不動如山難知如陰

杜牧曰く、敵の本情を知らざらば、我の然る後能く勝るなりと

雷震の二字を雷震さしたる書もある。

動如雷震

これは、軍の運用その妙を極むるをいふ。即ち、神出鬼没、かけ引きの疾いことは、大風のどこから来てどこへ去るか知らぬ如く、又正々蕭々、しづくと軍を進めることは、さながら森林の間々黙々として其の深さ知るべからざるが如く、又いざ侵掠攻撃といふ段になると、さながら猛火の焼くが如く、又その反対に、備へを固めて動かぬといふ時は、さながら山の泰然たるが如く、又、我が軍の動静が敵に知れないことは、さながら夜陰雲霧の覆へるが如く、又、いざ大活劇を演ずるとなれば、さながら大雷のはためく如く、時に爆弾三勇士なども跳んで出るのである。

掠郷分衆、廓地分利

さて、軍争功を奏して、敵の郷村を掠めては其の分捕品は我が衆に分ち與へ、敵地を取りひろけては其の利を分つて功を賞する。

懸權而動

權とは秤の錘である。秤にかけて物の輕重を量る如くに、彼我の虛實遠近遲速その他すべてを我が心に權りつゝ行動すべきである。さなくては軍争に利を得ることは出来ぬ。

先知迂直之計者勝。此軍争之法也

とにもかくにも、前に述べた如く、迂を以て直となすの計を先づ以て知る者は勝を占める。これが軍争の法である。

軍政曰、言不相聞、故爲金鼓。視不相見、故爲旌旗。

これから篇末までは、軍衆の耳目心氣を鎮め治むることを述べた。軍争には、これ亦非常に重要なことである。凡そ軍中には、命令號令等相聞えぬ憂がある、故に陣陣太鼓を作る又視力の十分届かぬ憂もある、故に旌吹流しの類を作る。(金鼓は坐作進退の節を知らしめるためのもの、旌旗は分合配置等を定めるに役立つもの)軍政とは、軍の舊典、即ち古への

王註軍政に古の軍書なり

李筌曰、秤の輕重、敵の別動、則ち動く

九變 第八

軍は機に臨んで變化することを貴ぶ。害の伏在する處、これを變じて却つて有利の條件
たらしむべきもの、その場合凡そ九つある。それを説いた故に九變と名づけたのであ
る。

孫子曰、凡用兵之法、將受命於君、合軍聚衆

これは、前の軍争篇の起筆の語と同じである。「凡用兵之法」から直ぐ次の文につづける方
が却つて意味がよく通ずるから、「將受命云々」の九字は衍文であらう。

圯地無舍

圯地とは水澤などの低地をいふ。そのやうな處に軍隊をとどめてはならぬ。

李筌曰く、
地下きを圯
といふ。行
けは必ず水
淹すなりと

衢地合交

四通八達の地では、我れ先づ諸侯と交はりを結んで、諸侯が敵國を助けるやうなことの無い
やうにする。

絶地無留

絶地とは交通不便の地。水・薪・秣なども得られぬ地。そのやうな處には軍が久しく留まつて
はならぬ。

圍地則謀

險阻に圍まれて、敵の往來には都合よく我れの出入には困難なといふやうな處では、あらか
じめ奇謀を設けて、敵に乗ぜられぬやうにする。

死地則戰

梅堯臣曰く
前後癡あり
決死戰に
在り

齊桓公曰
夫以地
事人者
不可不
慎也

萬死あつて一生をも得られまいといふやうな地に於ては死を決して戦ふあるのみ。迅速機敏に決死して戦へば生き、遅緩なれば敗亡を招く外はない。

塗有所不由

塗は道路。道路なればどこでも通るといふわけではなく、軍謀軍略上、わざと避けて通らない道もある。

軍有所不擊

敵軍でさへあれば必ず撃つとは限らず、わざと撃たないでおくこともある。

城有所不攻

敵城でさへあれば必ず攻めるとは限らず、わざと攻めないでおく場合もある。

地有所不爭

土地でさへあればどこでも争ひ取ればよいといふわけではなく、わざと争はないでおく時もある。

君命有所不受

要するに、軍は隨機應變以て勝を制すべきものであるから、時には君たり上たる者の命令をも受けないで我が考を實行することもある。(今の謂はゆる獨斷專行などもこれである)

故、將通於九變之利者、知用兵矣

以上列擧した十事の中、君命云々を除けば九事となる。いづれも時と場合によつて宜しきを制するのであるから之を九變といふ。此等應變宜しきを得て我が軍を有利に導き得る將は、よく兵を用ふることを知るものである。

將不通於九變之利者、雖知地形、不能得地之利

右の反對で、若し將たる者が、この九變を旨く利用してゆくことに通じないものであるとす

杜佑曰く、
九事の變、
皆時に臨ん
で宜しき道
に由らざる
故に變さざ
るなりとい

孟氏曰く、
國外の事を
將軍之を制
す

故用兵之法、無恃其不來、恃吾有以待也。無恃其不攻、恃吾有所不可攻也。

二つの其の字は敵を指す。敵が寄せて来ないからとて、そんなことを恃みにしてはならぬ。敵が来るのを待つて、何時でも之に應ぜられるといふ用意があるのをこそ恃みとすべきである。敵が攻めないからとて、それを恃みにして油断してはならぬ、如何なる場合にも敵は我を攻めることができないといふ情況にあるのをこそ恃みとすべきである。(蓋し虚實利害の理がこの内に存してゐるからである)

故將有五危。

故に將たる者の氣質々々によつて、五つの危きことがある。(尤も、それを自覺して善用すれば却つてそれが利となるものでもある。)

必死可殺也。

必死可殺也。必死可殺也。

さてその五危の第一に數ふべきものは、將たる者が勇のみ有つて智なく、必ず死して後已むといふ一徹者であると、之を相手とする敵は之を殺すより外仕方が無いのである。必生可虜也。

第二に、將たる者が智のみ有つて勇なく、生きることのみ考へる者であると、それを相手とする敵は之を生擒捕虜とすべきである。

忿速可侮也。

第三に、將たる者が怒りつほくて、短慮急速に事を爲す人であると、それを相手とする敵は之を侮ることになる。

廉潔可辱也。

第四に、清廉潔白は誠によいことではあるが、餘りに其の方が過ぎて他を思ふの心の餘裕の無い人であると、敵は之に乗じてわざと其の將に恥辱を與へて、その將をして不覺を取らせ

王曰く、將の性は重きを持たざるを貴ぶ。易しと。易しと。

得ることがある。（一） 第五に、將たる者、民衆を愛することは固より美徳であるが、それも極端に過ぎると、敵亦

第五に、將たる者、民衆を愛することは固より美徳であるが、それも極端に過ぎると、敵亦
それを見すかし、之に乗じて種々なることを仕向けて、その將をして奔命に疲れしめるとい
ふやうなこともできる。

凡此五者將之過也、用兵之災也。

以上掲げた五つのものは、將たる者の美點であると同時に缺點でもあるが故に、これからし
て取りかへしのつかぬ過失も生ずれば、兵の運用上の災害も起つてくるのである。戒慎せね
ばならぬ。

覆軍殺將、必以五危不可不察也。

一軍の敗北より、大將の死を招くまで皆この五危が因を爲すものであるから、深く思はなけ

良將は則ち、
然らず死せ
す必し死せ
生ずし死せ
に隨ひて用
ふ、急速に
す、可恥を
す、虎を如
ては、しか
くは、戸を
閉づ。動解
計を以てす
喜怒を以て
りらざるな

ればならぬ。と結んだのである。

行軍第九

行軍とは軍をやるといふことである。軍隊を動かす上についての諸般の心得を説いたの
である。

孫子曰、凡處軍相敵、

この一句はこの篇の起筆である。面して、後文、「絶山依谷」より、「伏姦之所」處までは軍
を處くことについて述べ、「敵近而靜」より、「必謹察之」までは敵を相することを述べたので
ある。相すとは察し視ることである。

絶山依谷、視生處高、戰隆無登、此處山之軍也。

行軍第九

絶をワタリ
よ讀んでも
王哲曰く、
絶は度な

李善曰、兵
黃帝始、兵
法、而後、
受、而、滅、
四、帝、以、
故、四、帝、
勝、つ、に、
勝、つ、に、
勝、つ、に、

をうしろにする。これは平野に於ける場合の心得である。

凡此四軍之利黃帝之所以勝四帝也

以上述べた山・水・斥澤・平陸に於ける四軍運用の利は、太古、黃帝が四方の諸侯（皆借して帝と稱したから四帝といふ）に勝つたわけのものである。と、上文を結んだのである。

凡軍、好高而惡下、貴陽而賤陰、養生而處實、軍無百疾、是謂必勝。

總じて軍は、高處を有利として喜び、低地を不利として厭ひ、陽地（山を西北に受けた處）を良いとし、陰地（山を東南に受けた處）をわるいとみる。水あり草あり以て人馬の生命を養ふに足り、隆高堅實の地に居て軍の衛生が最も良好である。といふやうであれば、軍中何等の病氣といふものが無い。これこそ必勝の一要件である。

丘陵隄防必處其陽、而右背之、此兵之利、地之助也。

丘陵とか堤防とかいつた土地の場合には、やはり、その東か南の陽地を占め、その高處を右背にするがよい。これが兵道の利となり、地形の助を得たことになる。

上雨水沫至欲涉者待其定也。

川の上流に雨が降つたと覺しくてその水の沫などが流れて來たら、それを渡渉しようとする者は水勢の定まるまで待つがよい。でないといふ、急水俄に漲つて非道い目を見ることがある。

凡地、有絶澗・天井・天牢・天羅・天陷・天隙、必亟去之、勿近也。
吾遠之、敵近之、吾迎之、敵背之。

絶澗とは、前後險峻絶壁にして水流その間にある處。天井とは、自然に井池の如くなれる處。天牢とは、自然に牢獄の如くなれる處。（峻山とりかこみ、入り易く出で難き地）天羅とは、自然に羅の如くなり、草木雜然茂生して身動きの自由ならぬ處。天陷とは、自然におとしあなの如くなれる處。天隙とは、自然のわれめの如き處。此等六つは皆地の害であるから、そのやうな處は大急ぎで去つて近づかないに限る。味方は成るべくそれらの害地を遠ざけ

梅堯臣の註
左の如し、
絶澗、前後險峻、水その中に横たはる。
天井、四面峻坂、澗壑の歸、
天牢、三面環絶、
天羅、入り易く、
天陷、出で難し、
草木叢密

曹操曰く、
恐くは半ば、
涉りて水速、
に漲らん

鋒鋒施す
天陷た
車下汚澤
天隙す
狭ひ兩山相向
洞相向
悪なり

て、敵にはそれに近よるやうに仕向け、味方はそれらを前にする（迎へる）やうにし、敵はそれらを背後にするやうに仕向ける。すると敵は不利に陥り、我は有利になり得るものである。

軍行有險阻・潢井・葭葦・山林・藪薈、必謹覆索之。此伏姦之所藏處也。

軍を進め行くうちに、溜池だの、深き坑だの、よし・あしの生えたところ、山林樹木の鬱々たる處があつたら、必ず慎重な態度で、何かあやしいことがないかと、幾度も搜索して見ることがよい。そのやうな處は、敵の伏兵や姦細（かくれて様子を見ざる者）などがかくれてゐるところである。

敵近而靜者、恃其險也。

これから以下の三十餘項は、敵を相るの法である。近くにゐたら合戦勝負をこそ決すべきで

あるに、さうは無くして靜まりかへつてゐる敵ならば、それは必ず地形の險阻を恃みとしてゐるのである。

遠而挑戰者、欲人之進也。

遠距離に居て未だ戦ふべきでもないのに彼から戦をしかけるのは、相手方が進出してくれることを希望するのである。

其所居易者、利也。

兵は元來要害な地を擇ぶべきであるに、さうはなくて、わざと平地に陣取る敵ならば、そこに何等かの有利な事情があるのである。

衆樹動者、來也。

遙かに見ゆる多くの樹木が動くのは、敵が寄せ来るしるしである。

衆草多障者、疑也。

障とは障へ蔽ふこと。敵ある方に多くの草など寄せ結ばれて隠蔽物のやうにしたものが澤山にあるのは、それはわざと寡兵を衆兵であるかの如くに思ひ疑はせて其の進出を沮むためである。

鳥起者、伏也。

鳥が俄かに高く飛びたつのは、必ずその邊の野に敵の伏兵があるのである。(目ざとく、見て驚きたつのである。)

獸駭者、覆也。

山林などにて、猪鹿などが俄かに驚き駆け出るのは、敵兵が潜行して我が軍を掩ひ襲はうとするのである。

塵高而銳者、車來也。

塵埃が高くするとく揚るのは、軍車が來たしるしである。

李筌曰く、兵を藏すを伏せといふ。張預曰く、鳥適平飛す、彼に高き起るも伏兵あるなり。

以下四項は塵埃についで觀察。

卑而廣者、徒來也。

塵埃が低くて廣いのは徒歩軍即ち歩兵が來たしるしである。

散而條、達者、樵採也。

塵埃が筋だつて上るのは、敵兵が處々に木を樵り薪を作つたりするのである。

少而往來者、營軍也。

塵埃の起ち方が少なくして、それが往つたり來たりするやうに見えるのは、敵が陣取をするしるしである。(陣を取るには、騎兵數騎を四方に馳せて、地形も見定めれば警衛にも當らしめるから、その塵埃が少しく上るのである。)

辭卑而益備者、進也。

敵から使者など來つた場合、その言葉がいかにも謙遜ぶかくして、而もその實狀を窺ふと

以下の諸項も亦敵情觀察の工夫。

塞の工夫
見すの難

ますく備を敷にし、用意おさく、怠りないといふならば、それは我に油断をさせて進撃し、
ようとするのである。

辭詭而強進驅者退也

詭は詐なりとある。使者などが大言壯語、詭辯を吐いて、いかにも強く出で、その軍兵まで
が前進疾驅して何等畏るゝ所なき體に見せるものは、その實は退却せんと欲するものである。

輕車先出居其側者陣也

輕車は馳車なりとか戰車なりとか註してある。(兵器糧食などを載せるのは重車)いくさ車が
先へおし出して軍の兩側に居るのを見たら、陣ぞなへをして來り戰はんと欲するものと思は
ねばならぬ。

無約而請和者謀也

約といふ字には窮するとか屈するとかいふ義がある。何等こまつたことも無いのに、故なく

和を請ふのは我を謀つて油断でもさせようといふのである。

奔走而陣兵車者期也

かけ走つて兵車をおし出し陣ぞなへをするのは、敵みづから、何か期約する所あつてのこと
であると見てとらねばならぬ。

半進半退者誘也

凡そ一隊の軍兵は協同一致の行動を爲すべきであるに、その半分は進み半分は退いて、いか
にも統制が出来て居らぬやうに見せるのは、我が軍をおびき寄せようとの手段である。

仗而立者飢也

仗は兵器。兵器によりすがつて立つてゐるのは、飢ゑた證據である。

汲而先飲者渴也

汲みあけた水を先づ取つて飲むのは、咽が潤いてゐるからである。(一人の飢渴を見て全軍の

見利而不進者、勞也。

目の前に有利な事物を見ながらも、進んで取らうとしないのは、その敵兵が疲勞してゐるのである。

鳥集者、虚也。

陣營のあたりに鳥が集まつてゐるのは、そこに人氣がないのである。

夜呼者、恐也。

敵の陣處に於て、夜呼ははる聲の聞えるのは、その將士共に臆病なのである。(勇みきつた軍には肅として咳一つも起らぬ)

軍擾者、將不重也。

陣中さう／＼しくざはつのは、大將に威嚴がないからである。

旌旗動者、亂也。

旗色の動くのは敵の軍兵亂れて浮足たつた證據である。

吏怒者、倦也。

吏とは將に屬した役人をいふ。それらの者が怒るのは兵士倦怠して軍規軍律を守らないからである。

殺馬肉食者、軍無糧也。

馬は軍中第一のもの。それを殺して食ふといふは、いよく糧食が盡きたのである。

懸飢不返、其舍者、窮寇也。

飯は飯を炊く器である。もう炊かない決心でそれを外に懸け棄てにしておき、軍がその宿舎

一説に馬に
人肉を食ふ
肉食者
殺馬肉食者
軍無糧也
懸飢不返
其舍者
窮寇也

來委謝者欲休息也

委は、こゝでは委質として、人質のこと。敵が人質をおくり來らせてわびごとをするのは、一時休息して機を見て再び起たうと思ふのである。

兵怒而相迎、久而不合、又不相去、必謹察之。

敵兵がいきりたつて我が軍を相迎へ、さうして、いつまでも、合戦するでもなく、又引上げ去るでもない、といふのは、それは敵に何か深き魂膽があるのであるから、よほど慎重に考慮して、萬違算の無いやうに處しなければならぬ。

兵非益多也、惟無武進、足以併力料敵、取人而已。

兵は必ずしも多いからとて益となすべきではない。たゞ武勇のみを恃んで暴進してはいけない。全軍力をあはせ協同一致以て敵を十分に料つて戦へばそれでよいのである。結局、人物本位でなければならぬ。(こゝは諸説まち／＼で、一つも感心すべきものが無い。しばらく斯

益の字の上
に貴の字あ
る書もあ
り、非、貴、ニ
益、多、也、
と讀む。そ
の方がよく
わかる。

人は即ち
敵。

夫惟無慮而易敵者、必擒於人。

敵を料ることなく、何等の熟慮もめぐらさないで、我が武に誇り敵を侮る者は、きつと敵に生擒せられる。と、前文の裏を述べたのである。前文と併せて、さきの三十餘項の結びとしたのである。

卒未親附而罰之、則不服、不服則難用也。

これより以下は、兵士を治める道を説いたのである。部下の兵士がまだ親しみなつきもしないうちに、やたらに處罰したりすると服従しない。服従しなければ用には立たないのである。

卒已親附、而罰不行、則不可用也。

部下の兵士がすでに我に親しみなつきつてゐるのに、罰を嚴格に行はないとなると、その部下は心驕つてこれまた用に立たない。

故令之以文、齊之以武、是謂必取。

であるから、文徳即ち仁愛以て下知命令を施し、武徳即ち嚴罰以て統制してゆくといふことは、これこそ必ず勝を取り得る道である。

令素行以教其民、則民服。

この民とは主として部下の兵士。教とは指揮教令。平素に於て將の威令がよく行はれて居り、さてこそ事ある場合の指揮教令に部下は克く服従するのである。

令不素行以教其民、則民不服。

さきの反對で、平素威令が行はれてゐないで、事ある場合に指揮教令を出したからとて、部下は服従するものでない。

令素行者、與衆相得也。

命令素行者、衆と相得也。

平素の威令が克く行はるゝ將は、その部下の衆と共に一身同體になつて、得意な行動が十分に取れるのである。

地形第十

地形とは山川險易の形、營を安んずる陣を布き兵を用ふる所の土地の形状である。地形を審かにしなければ勝を制することはできぬ。故にこの一篇を設け説いたのである。

孫子曰、地形有通者、有挂者、有支者、有隘者、有險者、有遠者。

先づ地形を六種に別つて其の名を列挙したのである。通とは道路交通の利ある地。挂（掛の字に同じ）とは、物が綱か鈎にでもかゝるやうに、行きはしても歸りに障礙があつて歸りかねる地。支とは、各、險阻を守つて互に支持するの地。隘とは兩山の間、川谷などの狹隘の

通者 道路交通
挂者 網羅の地
支者 網羅の地
隘者 兩山の間
險者 險阻の間
險者 險阻の間
險者 險阻の間

險者山川丘陵
遠者平陸
以上梅堯臣
の註

地。險とは險難切處、けはしく要害の地。遠とは、彼我相去ること遙かなる地。の險難の
我可以往、彼可以來、曰通。

我から敵地に往くことも易く、敵から我に來ることも易き地を通といふのである。

通形者、先居高陽、利糧道、以戰則利。資者、高者、利資者、

謂はゆる通といふ地形に於ては、往來自由なのであるから、先んじて小高い陽地に居り、兵糧運搬の道をも都合よくしてそして戦へばきつと勝利がある。

可以往、難以返、曰挂。

行くことは出来るが、歸ることはむづかしいといふやうなひつかまりある地を挂といふのである。(彼我の地犬牙の如く相錯はつてゐるとか、高低我れに不利なる地などこれである。)

挂形者、敵無備、出而勝之、敵若有備、出而不勝、難以返、不利。

引つかまりの有る地形では、敵が油断して居る時ならば進み出て勝つことが出来るが、若し敵が油断なく備へてゐたら、進み出ても勝たないで、そして歸ることもむづかしくなつて大いに不利である。

我出而不利、彼出而不利、曰支。

我が軍が出て不利、敵軍が出て不利、といったやうな地は、互に支持する外なき地のゆる、支といふ。

支形者、敵雖利我、我無出也。引而去之、令敵半出而擊之、

利。

支形の場合では、たとひ敵が我が方に利を以て誘ふやうなことをしても、決して出てはならぬ。むしろ我が軍は引きさがつて、敵を半分ばかりもおびき出して、それから撃つと有利である。

隘形者、我先居之、必盈之以待敵。若敵先居之、盈而勿從。

杜佑曰く、隘形は兵を以て陳

満せしめ、
敵をして進
退を得ざら
しめんと欲
す。人なり

高陽の陽
を、南西の
解したるの
も、あるが、
必ずしも南
西のみに限
るまい。

不盈而從之

狭隘な地形に於ては、我が軍が先づそこに居つた場合には、必ず十分に兵を以て固めを充實させて敵を待つがよい。若し又、敵がそこに先づ居つた場合には、敵軍の兵備が充實してゐたならばそれにかゝりあつてはならぬが、若し兵備が充實してゐなかつたならば、それにとりかゝつて、やつゝけてしまふがよい。

險形者我先居之必居高陽以待敵若敵先居之引而去之

勿從也

險難切處の地に於ては、我が軍が先づそこへ行つて居る場合には、是非高くてはれなくした地點に居つて、そして敵を待つて居るがよい。若しも、そこへ敵が先に來て居たならば、我は相手にならず引きさがつた方がよい。

遠形者勢均難以挑戰戰而不利

遠形者、勢均、難以挑戰、戰而不利。

彼我相距ること遠き地形に於ては、彼我の勢力が同等であつたらば我より戰を挑みかけてはならぬ。我から挑戰すれば必ず不利である。

凡此六者地之道也將之至任不可不察也

以上述べた六つは、地形上に於ける必然の道理である。將たる者の重大任務として、十分に考へねばならぬことである。と、上文を結んだのである。

故、兵有走者、有弛者、有陷者、有崩者、有亂者、有北者。凡

此六者非天地之災將之過也

だから、上述地形の運用といふことは固より大切だが、それ以外、別に又軍の敗退がまた六つにあらはれて來る。即ち、走とて早足ににけること、弛とて士氣弛んで用に立たぬこと。陷として、難局におちいること。崩とて、くづれてめちやうになること。亂とて、みだれて統制のつかぬこと。北とて、敵をうしろにして敗北すること。この六つは、天地自然に起る災害ではなくて、將たる者の運用宜しきを得ない過失である。

張預曰く、
凡そこの六
敗、皆人事
に在り。

いふ。...

張預曰く、
能く地形を
審みるは、
兵の助
を乃ち
の乃ち
未なり。
を料りて
を制する
は兵の本
なりと。

將に智慮がないから、敵の虚實を料ることが出来ず、わが少兵を以て敵の衆兵と合戦し、わが弱兵を以て敵の強兵を撃ち、えらびすぐつた精兵を先鋒たらしめるといふやうなこともせず、すべてに無謀な戦をするといふのでは、その結果たるや敗北といふことの外に何物もない。

凡此六者、敗之道也。將之至任、不可不察也。

以上述べた六つは、敗亡をまねく自然の道理であるから、將たる者の重大任務として、十分に考へねばならぬことである。

夫地形者、兵之助也。料敵制勝、計險阨、遠近、上將之道也。

「夫れ」と語を改めて、上述、地形、將道の中にも將道の最も重んずべきを説いたのである。いつたい、地形といふものは、兵を運用する上についての補助物件であることは勿論だが、それは主要物件ではない。敵の強弱虚實を計つて我が方に勝を取るやうにし、謂はゆる地形の險阻狹隘（隔は隘に同じ）な處とか遠近距離の關係などを計つて巧みに利用しゆくとかいふことこそ上將軍たるもの道で、これこそ一番大切なものである。

用の字は以
義の字と同

李筌曰く、
進退皆人
爲す。身
の非ざる
なりと。

知此而用戰者必勝、不知此而用戰者必敗。

上文述べたことを知つて戦ふ者はきつと勝つし、知らないで矢鱈に戦ふ者はきつと負ける。

故戰道必勝、主曰無戰、必戰可也。戰道不勝、主曰必戰、無戰可也。

であるから、戦の道に於て必ず勝つべき見込があつたら、主君が戦ふなど言つても戦闘を断行して宜しい。その反對に、勝つべき見込が無かつたら、主君が戦へと言つても戦はないで宜しい。（關外の重任を受けてゐる將軍にはそれだけの権能があるのである）

故進不求名、退不避罪、唯民是保、而利於主、國之寶也。

こゝで言ふ進退とは、文をあやなした語で、兵を進め退けるの義ではない。つまり、武功に誇つて名譽を求めたものでなく、たとひ命に違つて處罰されても遺憾とすることなく、只唯民の保護を以て任とし、そして主君の御爲になるといふ將こそは實に國家の寶である。

御勅諭にも
「慈愛を專
一に心かけ
よ」と仰せ
られてあ
る。

視^ル卒^ト如^ク嬰^ニ兒^ノ故^ニ可^ク與^レ之^ト赴^ク深^ニ溪^ニ視^ル卒^ト如^ク愛^ニ子^ノ故^ニ可^ク與^レ之^ト俱^ニ死^ス

これは、將として部下を治むる道を説いたのである。即ち、將たる者が平素部下の兵士を赤子の如く吾が愛子の如く手厚く扱ひ愛すればこそ、いざといふ場合、部下も一身同體の如く働いてくれ、これと共にどんな危険の地にも共に跳びこんでゆくのである。この將の爲に捨てる生命は惜しからずと、共に死をさへ俱にし得るのである。

厚^ク而^{シテ}不^レ能^ク使^フ愛^シ而^{シテ}不^レ能^ク令^ズ亂^ル而^{シテ}不^レ能^ク治^ム譬^ハ若^ク驕^ニ子^ノ不^レ可^ク用^ス也^{ナリ}

さればとて、部下を愛すること厚きに過ぐるばかりで、腦が手足を使ふ如くに使ふことも出來ず、號令嚴明に行はれもせず、軍紀風紀が亂れて治めることも出來ぬといふことになる、それはさながら家庭に於ける不良兒のやうなもので、ものゝ役に立てることが出來ぬ。(甘やかし過ぎてはいかぬ。恩威並び行はれることで大切がある。)

知^リ吾^ガ卒^ノ之^ノ可^ク以^テ擊^ツ而^{シテ}不^レ知^ズ敵^ノ之^ノ不^レ可^ク以^テ擊^ツ勝^ノ之^ノ半^{ナリ}也^{ナリ}知^リ敵^ノ之^ノ可^ク以^テ擊^ツ而^{シテ}不^レ知^ズ吾^ガ卒^ノ之^ノ不^レ可^ク以^テ擊^ツ勝^ノ之^ノ半^{ナリ}也^{ナリ}知^リ敵^ノ之^ノ可^ク以^テ戰^フ勝^ノ之^ノ半^{ナリ}也^{ナリ}

これからは、この篇の結びである。吾が士卒が勇敢にして以て敵を撃つに足ることだけを知つても、敵に隙無くまだ撃つべきでないといふことを知らないのでは、それでは勝利の半分で、以て全勝を得るの道で無い。又、敵に隙があつて撃つべきだといふことだけを知つても、吾が士卒が果して勇敢以て敵を撃つに足るか否かを知らないでは、これまた勝の半分で、以て全勝を得るの道ではない。又、敵を撃つのは今だといふことを知り、吾が士卒が勇敢以て敵を撃つに足るといふことも知つても、地形の上から考へてまだ戦ふべきではないといふことを知らなければ、これ亦勝の半分で、以て全勝を得るの道では無い。(要するに、全勝を得るの道は、彼を知り、我を知り、地形を知るといふ三知に通ずるにある。)

地、交地とは、彼我共に往來し得る地。衢地とは、諸方に通じ得るちまたの道。重地とは、入ること深くして、何となく重大決心の起りさうな地。圯地とは、水澤などあつて歩むに困難な地。圍地とは、まはりが山川などにて圍まれた地。死地とは、進退容易ならぬ必死の地。くはしくは後に一々説いてある。

先地の各々
に於いては
單に解釋を
下した。

諸侯自戰其地爲散地。

わが領地内にて戦へば、士卒が家路も近く妻子に心ひかれて專一にならぬ故に散地といふ。

入人之地而不深者爲輕地。

敵地に入るは入つても、まだ深く無いときは、おのづから輕舉妄動になり易い。故に輕地といふ。

我得則利。彼得亦利者爲爭地。

味方が取れば味方の利となり、敵が取れば敵方の利となる處はおのづから爭奪戦も行はれる

から爭地といふ。火急の隙へ突進し出づるは争地なり。争地とは、争ひあはるる地なり。

我可以往彼可以來者爲交地。

味方からも行かれるし、敵方からも來られるやうな通路交錯せる地は交地といふ。

諸侯之地三屬先至而得天下之衆者爲衢地。

第三者たる諸侯の國が他の三方の國々に隣接してゐて、敵なり味方なりが先づ其の國に至つて相結び、其の援助を得るやうに謀ると、自然天下の衆も之に靡き従ふやうになる。このやうな地は、さながら四通八達の衢の地にも喩ふべきである。何氏の説には、衢地とは、地要衝にして數道を控へ、先づ此の地に據れば衆必ず之に従ふ。故に之を得れば安く、之を失へば危し」とある。

孟氏曰く、
鄭君曰く、
晉に界する
れがこきこ
なりと。

入人之地深背城邑多者爲重地。

深く敵地に入り、敵の城邑を幾つも背後にしてゐるといふ地では、將士共におのづから重大

決心も起る處であるから、之を重地といふ。

行山林險阻沮澤、凡難行之道者、爲圯地。

山林とか、けはしい處とか、水澤の地とか、その他如何様なる地にもあれ、軍を行るに困難な道を行くのを名づけて、圯地に行軍するといふのである。圯地とは堤防などが大水で破れるといふ義の文字である。

所由入者隘、所從歸者迂、彼寡可以擊吾之衆者、爲圍地。

そこから這入るには隘く、一旦這入つたら、歸るには迂路曲折の難を経なければならず、從つて、敵の寡兵で以て吾が軍の多數をも打破るべきやうな處を圍地といふ。(山川などにて圍まれた地に、そのやうな處が多いのである)

疾戰則存、不疾戰則亡者、爲死地。

いのちを投げ出し火急に戰へば萬死を出でて一生を得るし、さもなくて、ぐづぐづすれば滅

亡の外ないといふやうな處を死地といふ。(前には高山あり、後には大水あつて進退これ谷まるといつたやうな處は多く死地である)

是故散地則無戰。

これからは、前述九地についての軍の運用法を説いたのである。即ち、散地では戰ふのでない。士卒の心専らならずして、勝を得ること難いから。

輕地則無止。

入ること淺きため、士卒の心軽くしてたゆみがちであるから。

爭地則無攻。

争地の場合では、我先づ之を占據してしまふやうにし、若し敵が先に占據してゐたら攻撃争奪は成るべくしない方がよい。損失多くて得ることが少いから。或は又、敵の術中に陥ることもなるから。

これより、各地に於ける心得を簡明に説いた。

交地則無絶

通路交錯の地で、軍なり糧道なりが申断され易い恐れがあるから、心してそのやうなことの無いやうにせよ。

衢地則合交

第三者としての諸侯の地であるから、いち早く其の諸侯と交を結び好を通じて、我が援助者たらしめよ。

重地則掠

敵地に深く入つてゐることだから、勢ひ糧食に窮乏を訴へるから、掠めざるを得ない。

李筌といふ人の説では、「無掠」として、不義を働き民心を失つてはならぬといふ意にしてある。

圯地則行

圯地はとにかく難處であるから、そんな處に足だまりを作つたりすべきではない。どんどん通過し去つてしまふがよい。

圍地則謀

敵の寡を以て吾が衆をも破らるべき處であるから、力づくでは勝てる見込が無い。必ず智謀策略をめぐらすべきである。

死地則戰

これはどうしても急戦以て萬死に一生を得るより外はない。ぐづぐづしてゐたら全滅である。

所謂古之善用兵者、能使敵人前後不相及、衆寡不相恃、貴賤不相救、上下不相收、卒離而不集、兵合而不齊、合於利而動、不
合於利而止。

「所謂」の二字の無い書もある。

既に九地を説き死地には則ち戦ふと言つた關係上、これから戦の道を述べるのである。謂はゆる古への巧みに兵を運用する名將は、よく智謀を以て敵に働きかけ、敵をして、前軍後軍互に密なる關係連絡を保つこともできなくなれば、敵の衆兵が寡兵を力だのみにすることもできず、寡兵が衆を力だのみにすることもできなくなれば、敵の衆兵が寡兵を力だのみにすることもできなくなれば、上下の心が一致せずしてそれを收拾することもできなくなれば、士卒が離ればなれになつてもそれを集めることもできなくなれば、士卒が合して一つにはなつても之を齊へて統制を取ることでもできなくならせる。つまり、我が勝利の道に合へば戰陣行動をするし、合はなければしないのである。

敢問、敵衆整而將來、待之若何。

これは疑問の起りさうな點に孫子自ら或る人の立場になつて問を設けて、さて之に答へる態度で明かに理解させる筆法である。押ししてお尋ねしますが、若し敵大勢で且つ陣容よく整備し、今にも我に攻めかゝらうとする場合があつたとしたら、どうしませう。

曰、先奪其所愛則聽矣。

前の設問に對する答である。我が軍が先づ敵の第一に愛惜して措かざる所のものを、何にてもあれ、我が方へ奪ひ取つてしまふと、その敵はすべて我が方の思ふがまゝになる。(愛惜して措かざる所のものは彼が恃める地の利にもあれ、財物子女にもあれ、或は糧道汲水の利にもあれ、すべてにかけて見るがよい)

兵之情主速。乘人之不及。由不虞之道。攻其所不戒也。

兵を運用するの情狀は、機敏神速といふことが第一である。敵の手くばりのまだ届かない所につけ込み、敵の思ひもよらぬ道により、敵の用心警戒してゐない所を攻める。さうすれば必ず成功するものである。(先づ其の愛する所を奪ふといふことも、これによつてできるのである。先といふ字と速といふ字とが相應じてゐる。)

凡爲客之道。深入則專。主人不克。

梅、樂、臣、曰、
速、兵、機、は、
當、に、人、の、備、
へ、ざ、る、に、乘、
す、べ、し、と。

張預曰く、置之危地、前皆往く、所に守れ、死に赴りて、奔北せしむ。

客とは客戦即ち敵地に入つて戦ふ方。主人とは客軍に對する其の土地がはの軍兵。總じて客軍として敵地に戦ふの道は、深く敵地に入るほど味方の軍兵の心は專一に集注されて勝に利あり、そして、主人がはたる敵は勝利を得られないものである。

掠於饒野三軍足食、謹養而勿勞、併氣積力、運兵計謀、爲不可測、投之無所往、死且不北。

さて客戦の場合に於ては、米穀豊かな地に於てその米穀を掠め取り、以て吾が大軍の糧食にも事欠かぬやうにし、十分士氣を養うて無駄骨折らせることなく、兵士の勇氣精力を十分に併せ蓄へて旺盛にし、之が運用については種々なる計謀を用ひて神變測られざるの巧智を以てし、かくて其の軍兵を逃げ往く所も無い謂はゆる死地に投げ込めば、死んでも北けたりする者はなく、皆必死の奮闘をする。

死焉不得、士人盡力、兵士甚陷則不懼、無所往則固、入深則拘、不得已則鬪。

迷信疑惑を去つて死を決心するの

右の如く、いよく死より外ないとなれば、どのやうなことでも成らぬことがあらうか。さうなると、士人誰しも必ず力の限りを盡すにちがひない。凡そ兵士がひどく死地に陥ちこんでしまへば、却て恐怖心は無くなる。逃げ往く所もないとなれば士氣は異常に緊張して鐵心石腸の如く固くなる。敵地に深く入りこめば繩縛りにでもあつたやうに自由氣儘は無くなつて、心專一になる。いよく仕方が無いとなればこゝに勇猛に鬪ふこととなる。拘はトラハルと訓する。拘束せられること。

是故其兵不修而戒、不求而得、不約而親、不令而信。

已に上述の如く危地にある場合であると、其の兵は、上官が格別調修することをしないで、その兵各自が相戒めて軍規軍律が行はれ、上官が格別要求しないで、その要望する所を得て、必死の働をもさせることが出来、誓約がましいことをしないで互に相親和し、格別の號令は發しなくても信といふことが保たれる。

禁祥去疑、至死無所之。

敢問、兵可使如率然乎。

例の設問法で一段の注意を喚起したのである。兵の運用、實にその率然といふ蛇の如く、首中尾共に敏速に相呼應し救援し得るものであらうか。

曰可。夫吳人與越人相惡也。當其同舟而濟、遇風、其相救也

如左右手。

さきの設問の答である。曰く、それはできるさ。といふのは、たとへば、吳國の人と越國の人とは、元來犬と猿のやうに仲がわるいものだが、それでも若し、同じ舟に乗りあはせて大河でも渡る時に、俄かに大風でも起つてその舟覆らうとする場合になると、きつと互に救ひあふこと、左手が右手の急を救ひ、右手が左手の難を救ふほどであらう。(危急の場合の人情は皆かうだ。故に兵士も、常は互に反目しあふ程のことがあつても、いざ決死の際となれば必ず一致の行動を取るものである。)

張預曰く、吳越は仇讐、同れ危難に處れば、則ち相救ふ如し。況や仇讐に非ざる者、率然の相救ふ如く、必ず一致の行動を取るものである。

是故方馬埋輪、未足恃也。

であるから、軍馬を縛り車輪を土に埋めて軍容の動かぬやうにと手あてをしても、そんな形の上のことは恃みにならぬ。(兵に決死の色あつてこそ恃みになるのである)

齊勇若一、政之道也。

全軍皆死に勇み、而も一進一止の放縱なく、さながら渾然たる一體の如く行動するに至らしめるのは、嚴明なる軍令の致す所即ち軍政の道である。

剛柔皆得、地之理也。

剛柔とは、兵の強弱をいふ。地勢地理を巧みに利用すれば、強兵弱兵皆共に戦つて敵に勝たしめることができるのである。

故善用兵者、携手若使一人、不得已也。

曹操曰く、方馬埋輪、未足恃也。示すなり。張預曰く、これ軍政の道なり。それを得たれば、

九地第十一

これより將
軍たる者
の能事を説

であるから、兵の運用に巧みな將が部下の衆と一心同體になり、一致提携して行動せしめること、さながら一人を召し使ふが如くであることは即ち(前にも述べた通り)軍兵を死地に立たせ、已むに已まれぬ状態にあらしめるからである。

將軍之事、靜以幽、正以治。

さて善く兵を用ふる將軍たる者の態度は如何といふに、極めて平靜にして奥底知れず窺はれざる處があり、公明正大にして一絲素れずよく治めてゆくべきものである。(以下、つづけて將軍たる者の事を説く)

能愚士卒之耳目、使之無知。

皮肉で語弊はあるが、將たる者は、言はゞ士卒を馬鹿にしてかゝつて眞の自分の意圖の有るところは打明けて知らせないのである。

易其事、革其謀、使人無識。

いつも同じ事同じ謀は決してやらぬ。手をかへ品をかへ、さまざまに變つたことを謀り行つて、全く人には何が何だかわからせない。

易其居、迂其途、使人不得慮。

その居處を易へたり、その道までもわざと遠まはりに行つたりして、まるで何の事か人には考へることもできないやうなことをする。

帥與之期、如登高而去其梯。

初めから戦闘意志などを發表することはせず、唯士卒を率ゐて「何日何時までに何々地點に到るべし」などと期約して引率し、いよく其の地點に達してから、「いざ戦へ」と號令する。このやりくちは、喻へば高い屋根にでも登らせて、それから梯子を撤去したやうなものだ。死を決して戦ふ外は無い。

帥與之深入諸侯之地、而發其機、焚舟破釜、若驅群羊、驅而

此合アても、是ア本「
并下式入の發、さけ
日交與と其能事せ
う言、式海のの言を
日録下能事カ。

曹式、心能事、
日録せ、るる、
日録せ、るる、
日録せ、るる、

往驅而來、莫知所之。

初より何等意志の表示はせず、士卒を率ゐて共に敵國に入り、こゝぞといふ處に到つて始めて戦機を勃發せしめ、さてこそ決戦なるぞと、水邊ならば舟を焚き陸上ならば炊事釜を打割つて決死を示す。このやりくちは、さながら無智の群羊をおひまはすやうなものである。追はるゝまゝにぞろ／＼と行つたり來たりするだけで、羊自らは何が何だかまるでわからない。と同じく、士卒自は何もわからないで行動してゐるのである。

聚三軍之衆、投之於險、此將軍之事也。

以上、將軍の事を説いた結びである。つまり、軍全體の士卒をあつめて悉く危険な死地に投げ込んで必死の戦鬪を爲さしめることは、一に將軍の爲すべきことである。といふのである。

九地之變、屈伸之利、人情之理、不可不察也。

それにつけても將たる者は、前に述べた九地の變、それに基づいて屈すべきは屈し伸ぶべき

杜牧曰く、今下文重く、九地を擧げ、今に欲す、故に此に於て、本を重言せしなり。

は伸すといふことについての有利な扱ひ方とか、人情自然の理としてかくあらねばならぬといふやうなことは、十分に考察せねばならぬことである。

凡爲客之道、深則專、淺則散。

凡そ客軍として敵地に入る場合に於て、前にも述べた如く、入ること深ければ士卒の心が專一となり、淺ければ散漫になりがちなものである。と、これから又、地勢のことを反復して説くのである。

去國越境而師者、絶地也。

わが本國を去り、國境を越えて軍を動かすといふことになる、懸絶れた處であるから、よほど注意しなければならぬ。

四達者衢地也。

くどいやうではあるが、前にも述べた通り、道が四方に通じて四方の諸侯の國に至り得る處

入深者重地也

敵地に深く攻め入つた場合をば重地といふのである。

入淺者輕地也

その反對に、敵地に入ること淺き場合は輕地といふのである。

背固前隘者圍地也

要害堅固の地をうしろにし、狹隘な處を前にしてゐる場合には、圍地といふ。さながら重圍中にあるやうなものである。

無所往者死地也

逃げばの無い處をば死地といふのである。

是故散地吾將一其志

であるから、散地とて、吾が國內の地に於ける場合は、將としては吾が部下の衆の心志を專一ならしめることに力を用ひねばならぬ。

輕地吾將使之屬

輕地とて、敵地に入ることまだ深からざる場合には、成るべく隊伍の相連なり相屬するやうにと計つて、間のとぎれるやうなことが無いやうにする。(前に、無止といつたのと同義である)

爭地則吾將趨其後

爭地とは、彼我共に得んと争ふ地であるから、敵がその地を見はなしたら、我は直ちに走り行つて占據すべきである。

交地吾將謹其守

交地は道路交錯して往來複雑なのであるから、十分に守りを嚴にし、油断手落の無いやうにする。

衢地吾將固其結

四方の諸侯に通すべき地であるから、十分に交はりを結び固めて、それらの諸侯が敵へ裏切らぬやうにする。

重地吾將繼其食

敵地に深入してゐるのであるから、第一に糧食がつよくやうにと心すべきである。

圯地吾將進其途

足場のわるい處であるから、すんく進んで、そんな處に止まらぬやうにする。

升き高
其日大
圍

圍地吾將塞其闕

もとく圍まれたやうな地で、敵は必ず吾が一方の退路即ち闕けた所を作つておくであらうが、そんなものがあると士卒が逃げ道ありと恃んで心ゆるむから、先づその闕路を塞いで、吾が軍氣の沮まないやうにする。

死地吾將示之以不活

死地の場合では、士卒に示すに、どうしてもこゝでは死より外はない、活くる路はないのだと知らせねばならぬ。

故兵之情、圍則禦、不得已則鬪、過則從

であるから、凡そ兵士の情として、敵に圍まれるれば必死になつて禦ぐし、戦はないでは居れぬといふことになれば死力を盡して鬪ふし、死地に陥ること甚だ過ぐれば上官の如何なる命にも服従するものである。と、九地の軍法の大意を括つたのである。(「過則從」については

異説が多い。是故、不知諸侯之謀者、不能預交、不知山林險阻、沮澤之形者、不能行軍、不用鄉導者、不能得地利。

これは前の軍争篇に説いた語であるが、こゝにも必要あつて再出したのである。即ち、隣國諸侯の謀を知らなければ、その諸侯とあらかじめ交はつて吾が利を得ることはできぬし、種の地形を知らなければ軍を進めることはできないし、その郷土の道案内がなくては地の利を得ることはできないのである。

四五者、不知一、非霸王之兵也。

四と五と合せて九。即ち以上説いた九地の中、その一つだけを知らないでも、諸侯の旗がしらとなつて天下に號令することはできないのである。

夫霸王之兵、伐大國、則其衆不得聚、威加於敵、則其交不得合。

其は大國に敵する國の代名詞。

前の語を承けて覇者の兵には敵すべからざることを述べたのである。即ち、よく九地の變を知つて巧みに運用する覇者の兵が大國を伐つといふことになる、その大國たる敵が、其の國味方の衆を聚めて防ぐといふこともできない。又その覇者の威力が敵國におほひかゝるとその敵國は、隣國と交はりを結んで合一して當るといふこともできなくなる。といふのである。

是故、不爭天下之交、不養天下之權、信己之私、威加於敵、故其城可拔、其國可隳。

であるから、霸王たらん程の者は、天下の諸侯と成るべく多く交を結んで其の力を假らうといふやうな點で争つたりはしない。又、天下の諸侯の權を知らず識らずのうちに我が方に收め取るやうに養ひ仕向けるといふやうなこともしない。只自己一天張で自己の威力を思ふがまゝに押し振つてゆく。さうすれば、その力で壓倒して、敵城を抜くこともできれば、敵國を破ることもできる。

犯は用ひ
る義の字
の義の字
さの義の字
用ひの字
抵つての
あつての
いふ面が
るいふ面
もあつて
いふ面が
説白が

施無法之賞、懸無政之令、犯三軍之衆、若使一人。

さて又これが將としての心得は、常法に外れた賞罰を行ひ、常の政道に外れた號令を出し、以て大軍を自由に使役すること、さながら一人を召し使ふやうにする。

犯之以事、勿告以言。

部下の衆を使役するには、只單に、「進め」とか、「撃て」とか令して、直ちに行動をさせるだけにし、決して、その理由意圖などを説明してはならぬ。(説明すると却つて疑惑も起れば異議も起り、自然に行動が鈍くなる)

犯之以利、勿告以害。

部下の衆を使役するには、利となる點だけを示してはけまし、害となる點は決して聞かせぬがよい。(害を聞かせると遲疑心が起る)

投之亡地、然後存、陷之死地、然後生。

「之」とは部下の衆。所詮、滅亡だ、死地だ、助かる道はないといふやうな所へぶち込むと、はじめて、眞實必死になるから、却つて生存を完うして勝利を得られる。

夫衆陷於害、然後能爲勝敗。

わが部下の衆兵士が、謂はゆる亡地・死地の如き、所詮害を免れぬ地に陥つてこそ、始めて心專一必死になるから、能く勝つことができるのである。

故爲兵之事、在順詳敵之意、并力一向、千里殺將、是謂巧能成事。

それ故に、凡そ兵を動かす場合には、初は敵の爲すがまゝに順つて、とにかく敵の意圖が如何なる所にあるかといふことを詳かに知り、さてこゝぞといふ所で、うんと力をあはせてまつしぐらに撃つてかゝり、千里の遠き所までも馳驅して敵將までも殺す。これこそ巧妙によ

こゝでは「敗」の字には意味なし。

く成功したものである。

是故、政舉之日、夷關折符、無通其使。

この政とは軍政、即ち軍中の法度、舉とは舉動、行動、動作、關を夷るとは、關所を閉ぢて、行通を禁止すること。符とは、關所通行の割符即ち通行券。それを折るとは、廢棄して、同じく通行を禁止すること。あるから、いよく軍中の法度を敷きいさ出陣といふことになる、(今で言へば戒嚴令でも敷いたかの如く) 關門を鎖し旅行券を廢棄して、勝手に使者の往來もできなくならせる。(そこにわが必死の態度をも示し、將た、敵の間諜をも忍びこませないやうにと警戒するのである)

勵於廊廟之上、以誅其事。

かくて廊廟即ち朝廷に於ては、勵精以て機務を執り、軍事は總て將軍に委ねながらも、密にその事を治めて、謀が外に漏れないやうにする。

張預曰く、兵は大事なり、べからざるべし、廟堂の上、密に治し、其の事を治め、課外に貴ぶるを誅む人もある。

敵人開闔、必亟入之。

さて又將としては、敵に聊かなりともすぎがあつたら早速これにつけ込んで有利な行動を取るがよい。開闔の闔はトツと訓するが、こゝでは開の字に重きを置いた熟語。開とは隙をいふ。

先其所愛、微與之期。

何事にもあれ、また如何様にもあれ、敵の好む所欲する所をよく知つて、こちらがさきまはりをして其のやうにお膳だてをして、ほのかに人知れず、かうしておけば必ずかうなるものと、その結果をあらかじめ期して我が軍の有利をはかる。

踐墨隨敵、以決戰事。

墨とは大工の墨繩。例へば今の陣中要務令とか諸の戦術の示すが如く、戦陣にも一定の法則あることは勿論で、この墨繩は守つてゆかねはならぬ。之を守りつゝ、而も敵の出方次第に

敵をナシシ、讀んで、微ニ見、之期、先其所愛、切つて、讀み、の好む所、先まはり、上別、期す、かじめ、る、く、機、變、に、あ、ゆ、く、の、で、あ

随つて臨機應變に戰事を決してゆく。それでこそ眞に勝を制せらるゝのである。

是故、始如^{コノ}處女、敵人開^ク戸、後如^{ニハ}脱兔、敵不^ズ及^バ拒^グ

であるから、始め我軍は、さながら、きびすめのか弱き如くによそほふ、それで敵は城門な

ども打開いて油断する。さてこそこゝだと討入る段になると、さながら網をぬけ出た兎の如

くだ。その勢ひ當るべからず、敵が拒ぎおほせるものでない。これは實に千古の名言である。孫子の説は、これで盡きたともいふべしである。

式 其 訓 愛 尚 典 之 四 十 二 火 攻 第 十 二

火 攻 第 十 二

兵戰には、已むことを得ずして火攻も行はねばならぬことがある。由てこゝにこの一篇を説いた。

孫子曰、凡火攻有五。一曰火人、二曰火積、三曰火輜、四曰火庫、五曰火隊。

人を火くとは士卒を焼き殺すこと。積を火くとは糧食を焼き盡すこと。輜を火くとは輜重即ち被服兵具等を載せた車を焼き盡すこと。庫を火くとは庫を焼き拂ふこと。隊を火くとは隊伍に火を懸けて其の備をみだすこと。凡そ火攻にこの五種がある。

行火必有因。煙火必素具。

火攻を行ふには、必ずそれに都合のよい状況に因りちなむことがなくてはならぬ。さうして又、火薬油等凡そ火攻に用ふべき材料は必ずかねて用意をしておかねばならぬ。

發火有時、起火有日。時者天之燥也。日者月在箕壁翼軫也。

凡此四宿者、風起之日也。

即ち火を發ち起すには時日の宜しきを選ばねばならぬ。例へば、雨久しく降らず物のよく乾

因は主さし
ては下文の
時に因り地
に因るをい
ふ。曹操曰
く、煙火は
機具なり

杜牧曰く、
宿者は月の
宿る所なり
風の使なり

曹操曰く、
煙火は
機具なり

燥してゐる時とか、或は月のやどりが天の二十八宿中、箕壁翼軫の四宿にある日などが宜しい。といふのは、この四宿の處に月の在る日は、多くは風の起る日だからである。(これは古の天文學に基いた説である)

凡火攻必因五火之變而應之

五火とは、前述の火人・火積・火庫・火隊をいふ。總じて火攻といふものは、我が間者が入つて火を放つか、敵中に内通の者があつて放つか、いづれにしても、火を放つただけでは駄目なので、火に因つて變を爲したその火のさわぎに乗じて、兵を以て之に應じて攻むべきである。

火發於内則早應之於外

即ち、火が敵中に起つたならば、その機をはづさず急に外から之に應じて攻めるのである。と前のことを反覆して説いたのである。

一日火人 二日火積 三日火庫 四日火隊

曹操曰く、兵を以て之に應ずるなり

火發兵靜者待而勿攻

敵中に火は起つたが、敵兵は靜かにして亂れないといふ場合は、必ず敵に備があるのだから、その時は直に輕卒に攻めかゝつてはならぬ、更に他の情況の變を待たねばならぬ。

極其火力可從而從之不可從而止

その火力の工合を見盡して、今こそ攻めてよからうといふ時であつたら攻めるし、さもなかつたらやめる。

火可發於外無待於内以時發之

若し又、外から火をかけることのできる好機會でもあつたら、内から起るのを待つまでもなく、適當な時にかけるがよい。

火發上風無攻下風

敵の風かみから火が起つたら、決してその風下へまはつて攻めてはならぬ。(敵と同じく焚か
るべく、又敵は通路を失つて、必死になるから)

晝風久、夜風止

概して、晝吹きだした風は長く吹き、夜吹き出した風は早く止む。(火攻にはこんなことも考
慮する必要がある)

凡軍必知五火之變以數守之

凡そ軍陣には、この五火の變といふことがあるものだといふことをよく知つて、種々なる術
數をつくして用心堅固に守るべきである。(五火の變は、必ずしも敵に於てのみあるものでな
く、我にも亦有るべきものであるから)

故以火佐攻者明以水佐攻者強水可以絶不可奪

であるから、火攻を以て攻撃のたすけとする場合は、とにかく照明にして何ものも見えずく、

水攻を以て攻撃のたすけとする場合は、水は弱さうに見えても強いものである。水攻の場合
は、敵の相互の連絡を絶つ位は何でも無い。が併し、敵の城郭物資を奪ひ取るわけにはゆか
ぬ。(それができるのは火攻である)

夫戦勝攻取而不修其功者凶命曰費留故曰明主慮之

夫戦勝攻取而不修其功者凶命曰費留故曰明主慮之
それ火攻や水攻やと無謀な攻撃に戦勝攻取はしたものの、その効果は何も無い、何等國民
福にもならなかつたといふのでは凶事である。そんないくさは、徒らな費えであるから、明
君たる者は深くこゝに思をめぐらし、良將たる者はよく其の戦の効果があつたやうにとつとめ
る。(費留の語義が十分にはわからぬ)

一説に、功を事といふ意味に見て、戦勝攻取を欲しながら火攻水攻の事をも敢てしないで戦
を長びかせるのは、徒らな費えの長逗留である。と説いてある。又、修功を行賞の意に見た
説もある。

費留とは、戦勝攻取はしたものの、その効果は何も無い、何等國民福にもならなかつたといふのでは凶事である。そんないくさは、徒らな費えであるから、明君たる者は深くこゝに思をめぐらし、良將たる者はよく其の戦の効果があつたやうにとつとめる。(費留の語義が十分にはわからぬ)

奉は奉養の義で、こゝで軍の糧食等はない。

必ず間者を用ひて敵の情實を探り知る必要が大いにある。故にこの一篇を設けた。

孫子曰、凡興師十萬、出征千里、百姓之費、公家之奉、日費千金、
内外騷動、怠於道路、不得操事者七十萬家、相守數年、以爭一
日之勝、而愛爵祿百金、不知敵之情者、不仁之至也、非人之將
也、非主之佐也、非勝之主也。

凡そ大國に於て、今假りに十萬の大軍を興し、出でて千里に遠征するといふことになると、
一般人民の費えといひ、おかみの御費用といひ、それは莫大なもので、日毎に千兩も萬兩も
費し、國の内でも外でも大きなきをなし、人民は右往左往で道路に疲れはて、わが家業に従事
し得ないものが實に澤山となる。假に古制に従つて八軒の家が隣りあひ、その内の一家の人
が從軍するとすれば、のこり七家が國に居つて兵糧を運んだり、又は從軍者の家族を扶助し
てやつたりするので、つまり、十萬人の出兵に對しては七十萬家の人々が、家業も手につか

一日とは、たゞ長時間に亘らぬ。

動くとは戦争するこゝに先知といふ二字が大切である。

ぬといふことになるのである。そして、その大軍が敵と睨みあひになつて互に對陣し守ること
數年にも及び、さて（勝敗は一日一時に決するものであるが）その一日の勝を得ようと争ふ。
戦争は實にかくの如き重大事件である。その大事な戦争に於て、間諜に與ふべき官爵俸祿や
わづか百兩ばかりの賞金くらゐを借んで間諜を用ひず、従つて敵の状況をも能く知らないで
そのために戦争を長びかせたり、敗軍したりするのでは、國家の損失や生民の塗炭の苦みを
も察せぬ不仁者の最も甚だしいものである。そのやうな大將は人の將たる資格の無いもので
ある。人君を輔佐する資格の無いものである。勝利の主となる資格の無いものである。（故に
わづかの爵位や賞金などは惜まないうで間諜は用ふべきである。と、こゝでは間者、間諜とい
ふ語を用ひないで其の意を含めたのである。）

故明君、賢將、所以動而勝人、成功出於衆者、先知也。

であるから、賢明な君主や大將が、兵を動かし戦争をして必ず敵に勝ち、衆人に抜き出でた
成功を手つ取りばやく收めるわけは、（間者などを用ひて）先づ敵の情實狀況を知りぬいて
るからである。

人さいふ字
が大切であ
る。

長短濶狭遠
近大小は、遠
度數で驗す
るこそが、出
来るが人の出
情偽が人の出
からぬは、わ
か

先知者不可取於鬼神不可象於事不可驗於度必取於人知敵之情者也

さてその、敵情を先づ知るといふことは、鬼神に祈ることや卜筮などによつて得られるものでもなく、事物の形象に基づいた淺薄皮相の判断で得られるものでもなく、度數で計り驗べてわかるといふものでもない。必ずや、人即ち間諜を用ひて、それに由て敵の情實を十分に知り得るといふ方法あるのみである。(こゝで始めて人即ち間者といふことを文字上に明かに出した)

故用間有五有郷間有内間有反間有死間有生間

前に述べたことを承けて、こゝに用ふべき間者の種類を列舉した。郷間とは、敵の郷土の民を用ひて我が方の間者にする事。内間とは、敵の内にある者を我が方の間者にする事。反間とは、敵から出した間者を巧みに取り込んで我が方の間者たらしめる事。死間とは、我が方の間者を敵に殺させてもいゝ覺悟でそれを用に立てる間者の事。生間とは我が方よ

神紀の紀の
字を道理の
解したの
あ

五間俱起莫知其道是謂神紀人君之寶也

以上五種の間者がそれ／＼巧みに起用され、それによつて、各間者の言行を綜合して以て敵情を十分に探知し、而も敵方では、何故に斯くも内情を探られたか、その筋合がどうも合點がゆかぬといふ程である、それほど巧妙に間者を使用することは、人間わざとも思はれぬ不思議微妙な道理である。そして、かゝる間者の運用こそ、實に人君の寶とすべき重寶なものである。(これによつて、長びく戦を縮めて勝をも得られるから)

郷間者因其郷人而用之

これから五間の説明である。即ち、郷間とは、敵の郷民に因て行ふものである。(彼等の義心薄きに乗じて、之に利を啗はせて間者たらしめるのである)

内間者因其官人而用之

杜佑曰く、
敵間をして
來り我を視
しむ。我之
を知り、我
を厚く賂ひ
て、許して
反つて我が
間たりとむ
る。

杜佑曰く、
敵間をして
來り我を視
しむ。我之
を知り、我
を厚く賂ひ
て、許して
反つて我が
間たりとむ
る。

内間といふのは敵の官職に在る者を巧みに懐き込んで我が間者とするのである。

反間者因其敵間而用之。

反間といふのは敵から来た間者に因て、それを巧みに利用して我が間の用に立たせることである。

死間者爲誑事於外令吾間知之而傳於敵間也。

死間といふのは、我が軍に於て、わざといつはりごとをして見せて、それを吾が間者に會得させて、吾が間者からその誑事を敵の間者に告げ知らせるのである。(そのため敵が不利に陥つて、あとからそれが誑事即ち拵へごとであるとわかれば、敵は必ず吾が間を殺してしまふ。どうせ、この種の間者は終を全うせられない、故に死間といふ)

生間者反報也。

生間といふのは、吾が遣はした間者が必ず死をのがれて生きて返つて敵情を委細報告するや

杜佑曰く、
若し親しく
撫を以てす
賞を以てす
るにあらす
ば、反つて
敵の用とな
り我が情を
洩さん。

うにと仕組んで用ひるものである。

故三軍之事、親莫親於間。

右のやうな次第であるから、凡そ三軍の衆を扱ふ上に於て、上下一致し、互に親睦すべきは勿論ながら、將として最も親むべきは間者が第一である。(なぜかならば、間者は敵中へ忍びこませるものであるから、あくまで將に屬して眞實忠誠であつてくれねばならないからである。でない、間者が却てあたとならぬにも限らぬ。重賞を與へる必要もこゝにある)

賞莫厚於間、事莫密於間。

恩賞を與へる段に於ては、間者に一番多く與へるし、事を秘密に扱ふといふ點に於ては、間者に於けるほど秘密を要するものはない。(將の口より出て間者の耳に入り、間者の口より出て將の耳に入る、その他はまるで與り知らぬ。といふのでないと、間者を用ひた爲に却て大失敗をすることにもなる。)

用也。漢文宋明... 因是而知之。故死間為誑事。可使告敵。因是而知之。故生間可使如期。

いづれ敵の間者が入つて来て我が軍の動靜を問はうとするに相違ないから、是非それを索し求めて、それに厚く利を與へて自然こちらへ歸くやうにし、いろく道をつけて、宿舎なども與へて長逗留もするやうに仕向ける。さうすれば、その反間たるや、大いに我が用に立つものである。(即ち下文の通りである)

因是而知之。故郷間・内間・可得而使也。

是とは反間をいふ。上文の如く反間が我方に長逗留でもすることになれば、それによつて敵情を窺ひ知ることができ、敵の郷民官人などの様子をも知られる故に、それを足場にして郷間や内間までも使ふことができるやうになるものである。

因是而知之。故死間為誑事。可使告敵。因是而知之。故生間可使如期。

前述の如く、反間によつて敵情が十分に知られるからこそ、いつはりごとをして、死間をしてそれを敵に告げさせることもでき、生間が豫期の如く働きをして日限どほりに歸つてくることもできるのである。(故に反間は五間中の最も大切なものである)

五間之事、主必知之。知之必在於反間。故反間不可不厚也。

既に述べた五種の間者の事は、人主たる者の必ず知らねばならぬことである。そして、この種々の間者を巧みに用ひて敵情を知ることが、第一、反間によるのが最も有効である。故に反間には厚く利を以て賂うて、必ず我が用に立つやうにと仕向けねばならないのである。と五間の事を綜合し、反間の最も大切なことを述べて全文の結びに近づいたのである

昔殷之興也、伊摯在夏。周之興也、呂牙在殷。故惟明君賢將、能以上智為間者、必成大功。此兵之要、三軍之所恃而動也。

之を實際の史實にかんがへて見ても、昔、殷の湯王が興つて、夏の桀王を滅ぼし天下を統一したときには、湯王の師たる伊摯即ち伊尹といふ大賢人が初め夏の桀王の處に仕へてゐた。

伊は姓、字は字。
呂は姓、字は字。

いは間者として行つてゐたやうなもので、その爲めに敵情がよくわかつてゐたから、天下
 一統の大業ができたのである。又、周の武王が興つて殷の紂王を滅ぼし天下を一統したとき
 には、武王の師たる呂牙即ち太公望呂尙が初め殷の紂王の所にゐたといふが、これ亦間者と
 して行つてゐたやうなもので、その爲めによく敵情がわかつてゐたから、天下一統の大業が
 できたのである。かやうな次第であるから、たゞ賢明なる人主や大將のみは、よく最上智の
 人を間者に用ひて大成功を遂げたものである。實に間者の運用こそは、兵法上の要であり、
 三軍の衆は、この間者の力を待みにしてこそ目ざましき活動を演じ得るのである。

孫子曰く、兵者國之大事、死生之地、存亡之道、不可不察也。故經之以五事、校之以計、而索其情。一曰道。二曰天。三曰地。四曰將。五曰法。道者令民與上同意也。故可與之死、可與之生、而民不畏危。天者、陰陽、寒暑、時制也。地者、遠近、險易、廣狹、死生也。將者、智、信、仁、勇、嚴也。法者、曲制、官道、主用也。凡此五者、將莫不聞。知之者勝、不知者不勝。

孫子原文譯文對照

始計 第一

先づ通讀數回以てその大體をつかまれたし

孫子曰、兵者國之大事、死生之地、存亡之道、不可不察也。

故經之以五事、校之以計、而索其情。

一曰道。二曰天。三曰地。四曰將。五曰法。

道者令民與上同意也。故可與之死、可與之生、而民不畏危。

天者、陰陽、寒暑、時制也。

地者、遠近、險易、廣狹、死生也。

將者、智、信、仁、勇、嚴也。

法者曲制、官道、主用也。

凡此五者、將莫不聞。知之者勝、不知者不勝。

孫子曰く、兵は國の大事、死生の地、存亡の道なり、察せざるべからざるなり。

故に之を経するに五事を以てし、之を校するに計を以てして其の情を索む。

一に曰く道。二に曰く天。三に曰く地。四に曰く將。五に曰く法。

道とは民をして上と意を同じくせしむるなり。故に之と死すべく、之と生くべく、而して民畏危せず。

天とは陰陽・寒暑、時の制なり。地とは遠近・險易・廣狹・死生なり。

將とは智・信・仁・勇・嚴なり。法とは曲制・官道・主用なり。

凡そ此の五つのもの、將、聞かざる莫し。之を知る者は勝ち、知らざる者は勝たず。

故校之計、而索其情。曰主孰有道、將孰在能、天地孰得、法令孰行、兵衆孰強、士卒孰練、賞罰孰明。吾以此知勝負矣。將聽吾計、用之必勝。留之。將不聽吾計、用之必敗。去之。

計利以聽、乃爲之勢、以佐其外。勢者、因利而制權也。

兵者詭道也。能而示之不能、用而示之不用、近而示之遠、遠而示之近、利而誘之、亂而取之、實而備之、強而避之、怒而撓之、卑而驕之、佚而勞之、親而離之、攻其無備、出其不意。此兵家之勝、不可先傳也。

孫子原文文鑑文鑑

故に之を校するに計を以てし、而して其の情を索む。曰く、主孰れか道ある、將孰れか能ある、天地孰れか得たる、法令孰れか行はる、兵衆孰れか強き、士卒孰れか練れたる、賞罰孰れか明かなると。吾、此を以て勝負を知る。將た吾が計を聽きて之を用ひば必ず勝たん。之に留まらん。將た吾が計を聽きて之を用ひずば必ず敗れん。之を去らん。

計利以に聽かれなば、乃ち之が勢を爲して、以て其の外を佐けん。勢とは利に因りて權を制するなり。

兵は詭道なり。故に能にして之に不能を示し、用ひて之に用ひざるを示し、近くして之に遠きを示し、遠くして之に近きを示し、利して之を誘ひ、亂して之を取り、實なれば之に備へ、強ければ之を避け、怒りて之を撓ませ、卑りて之を驕らせ、佚なれば之を勞し、親なれば之を離し、其の備なきを攻め、其の不意に出づ。此れ兵家の勝、先づ傳ふべからざるなり。

夫未戰而廟算勝者、得算多也。未戰而廟算不勝者、得算少也。多算勝、少算不勝、而況於無算乎。吾以此觀之、勝負見矣。

作戰第二

孫子曰、凡用兵之法、馳車千驥、革車千乘、帶甲十萬、千里饋糧。則内外之費、賓客之用、膠漆之材、車甲之奉、日費千金。然後十萬之師舉矣。其用戰也、勝久則鈍兵、挫銳攻城則力屈、久暴師則國用不足。夫鈍兵挫銳、屈力殫貨、則諸侯乘其弊而起。雖有智者、不能善其後矣。故兵聞拙速、未睹巧之久也。

夫れ未だ戰はずして廟算勝つ者は、算を得ること多きなり。未だ戰はずして廟算勝たざる者は算を得ること少なきなり。多算は勝ち、少算は勝たず。而るを況や算なきに於てをや。吾、此を以て之を觀て、勝負見はる。

孫子曰く、凡そ兵を用ふるの法、馳車千驥、革車千乘、帶甲十萬、千里に糧を饋る。則ち内外の費、賓客の用、膠漆の材、車甲の奉、日に千金を費す。然る後、十萬の師舉ぐべし。其の戰を用ふるや、勝つも久しければ則ち兵を鈍らし、銳を挫き、城を攻むれば則ち力屈し、久しく師を暴せば則ち國用足らず。夫れ兵を鈍らし銳を挫き、力を屈せしめ貨を殫さば、則ち諸侯其の弊に乗じて起たん。智者ありと雖も其の後を善くすること能はじ。故に兵は拙速を聞く。未だ巧の久しきを睹ざるなり。

夫兵久、而國利者、未之有也。故不盡知用兵之害者、則不能盡知用兵之利也。善用兵者、役不再籍、糧不三載。取用於國、因糧於敵。故軍食可足也。

國之貧於師者、遠輸。遠輸則百姓貧。近於師者貴賣。貴賣則百姓財竭。財竭則急於丘役。力屈、財殫、中原內虛。於家、百姓之費、十去其七。公家之費、破車罷馬、甲冑、矢弩、戟楯、蔽櫓、丘牛、大車、十去其六。故智將務食於敵。食敵一鍾、當吾二十鍾。芻杆一石、當吾二十石。故殺敵者怒也。取敵之利者貨也。故車戰、得車十乘已上、賞其先得者、而更其旌旗、車雜而乘之、卒善而養之。是謂

夫れ兵久しうして、而して國の利なるものは未だ之れあらざるなり。故に兵を用ふるの害を盡知せざる者は、則ち兵を用ふるの利を盡知する能はざるなり。善く兵を用ふる者は、役再籍せず、糧、三載せず、用を國に取り、糧を敵に因る。故に軍食足るべきなり。

國の、師に貧なる者は遠く輸すればなり。遠く輸すれば則ち百姓貧し。師に近き者は貴賣す。貴賣すれば則ち百姓財竭く財竭くれば則ち丘役に急なり。力、屈し、財、中原に殫き、内、家に虚しく、百姓の費、十に其の七を去る。公家の費は車を破り馬を罷らし、甲冑・矢弩・戟楯・蔽櫓・丘牛・大車、十に其の六を去る。故に智將は務めて敵に食む。敵の一鍾を食むは吾が二十鍾に當り、芻杆一石は二十石に當る。故に敵を殺す者は怒なり。敵の利を取る者は貨なり。故に、車戰、車十乘已上を得れば、其の先づ得られたる者を賞し、而して其の旌旗を更へ、車は雜へて之に乗らしめ、卒は善く

勝敵而益強。故兵貴勝不貴久。故知兵之將、民之司命、國家安危之主也。

謀攻第三

孫子曰、凡用兵之法、全國爲上、破國次之。全軍爲上、破軍次之。全旅爲上、破旅次之。全卒爲上、破卒次之。全伍爲上、破伍次之。是故、百戰百勝非善之善者也。不戰而屈人之兵、善之善者也。

故上兵伐謀、其次伐交、其次伐兵、其下攻城。攻城之法、爲不得已。修櫓、積糧、具器械、三月而後成。距闔又三月而後

して之を養ふ。是れを敵に勝ちて強を益すと謂ふ。故に兵は勝つことを貴び、久しきを貴ばず。故に兵を知るの將は、民の司命、國家安危の主なり。

孫子曰く、凡そ兵を用ふるの法、國を全くするを上と爲し、國を破るは之に次ぐ。軍を全くするを上と爲し、軍を破るは之に次ぐ。旅を全くするを上となし、旅を破るは之に次ぐ。卒を全くするを上と爲し、卒を破るは之に次ぐ。伍を全くするを上と爲し、伍を破るは之に次ぐ。是故に、百戰百勝は善の善なる者に非ざるなり。戰はずして人の兵を屈せしむるは善の善なる者なり。

故に上兵は謀を伐ち、其次は交を伐ち、其次は兵を伐ち、其の下は城を攻む。城を攻むるの法は已むことを得ざるが爲なり。櫓・積糧を修め、器械を具へ、三月にして後に成る。

已。將不勝其忿而蟻附之、殺士三分之一。而城不拔者、此攻之災。故善用兵者、屈人之兵而非戰也、拔人之城而非攻也。毀人之國而非久也。必以全爭於天下。故兵不頓、而利可全。此謀攻之法也。

故用兵之法、十則圍之、五則攻之、倍則分之、敵則能戰之、少則能逃之、不若則能避之。故小敵之堅、大敵之擒也。夫將者國之輔也。輔、周則必強、輔、隙則國必弱。

故君之所以患於軍者三。不知軍之不可以進、而謂之進、不知軍之不可以退、而謂之退、是謂糜軍。不知三軍之事、

而同三軍之政者、則軍士惑矣。不知三軍之權、而同三軍之任、則軍士疑矣。三軍既惑且疑、則諸侯之難至矣。是謂亂軍引勝。故知勝有五。知可以戰、與不知可以戰者勝。識衆寡之用者勝。上下同欲者勝。以虞待不虞者勝。將能而君不御者勝。此五者知勝之道也。

故曰、知彼知己、百戰不殆。不知彼、而知己、一勝一負。不知彼、不知己、每戰必敗。

距圍又三月にして後に已む。將其の忿に勝へずして之に蟻附し、士を殺すこと三分の一。而して城拔げざるものは、此れ攻の災なり。故に善く兵を用ふる者は、人の兵を屈せしむ、而も戦ふに非ざるなり。人の城を抜く、而も攻むるに非ざるなり。人の國を毀る。而も久しきに非ざるなり。必ず全を以て天下に争ふ。故に兵、頓せずして、而して利、全うすべし。此れ謀攻の法なり。

故に兵を用ふるの法、十ならば則ち之を圍み、五ならば則ち之を攻め、倍ならば則ち之を分ち、敵ならば則ち能く之に戦ひ、少くば則ち能く之を逃れ、若かずば能く之を避く。故に小敵の堅は大敵の擒なり。夫れ將なる者は國の輔なり。輔、周なれば則ち國必ず強く、輔、隙あれば則ち國必ず弱し。故に君の、軍に患する所以のもの三つ、軍の以て進むべからざるを知らずして、而して之に進めと謂ひ、軍の以て退くべからざるを知らずして、而して之に退けと謂ふは、是れを糜

軍と謂ふ。三軍の事を知らずして、而して三軍の政を同じくする者あれば、則ち軍士惑ふ。三軍權を知らずして、而して三軍の任を同じくすれば、則ち軍士疑ふ。三軍既に惑ひ且つ疑はば、則ち諸侯の難至らん。是れを、軍を亂し勝を引くと謂ふ。故に勝を知るに五あり。以て戦ふべきと、以て戦ふべからざるとを知る者は勝つ。衆寡の用を識る者は勝つ。上下欲を同じくする者は勝つ。虞を以て不虞を待つ者は勝つ。將能にして、而して君御せざる者は勝つ。此の五つのは勝を知るの道なり。

故に曰く、彼を知り己を知れば百戦殆からず。彼を知らず、而も己を知れば一勝一負す。彼を知らず己を知らざれば戦ふ毎に必ず敗る。

軍形第四

孫子曰、昔之善戰者、先爲不可勝、以待敵之可勝。不可勝在己。可勝在敵。故善戰者、能爲不可勝、不能使敵必可勝。故曰、勝可知、而不可爲。不可勝者、守也。可勝者攻也。守則不足。攻則有餘。善守者藏於九地之下、善攻者動於九天之上。故能自保而全勝也。

見勝不過衆人之所知、非善之善者也。戰勝而天下曰善、非善之善者也。故學秋毫、不爲多力、見日月、不爲明目、聞雷霆、不爲聰耳。古之所謂善戰者勝、勝

孫子曰く、昔の善く戦ふ者は、先づ勝つべからざるを爲し、以て敵に之れ勝つべきを待つ。勝つべからざること己に在り。勝つべきことは敵に在り。故に善く戦ふ者は、能く勝つべからざるを爲すも、敵をして必ず勝つべからしむる能はず。故に曰く、勝は知るべし、而も爲すべからずと。勝つべからざる者は、守ればなり。勝つべき者は、攻むればなり。守るときは則ち足らず。攻むるときは則ち餘りあり。善く守る者は九地の下に藏れ、善く攻むる者は九天の上に動く。故に能く自ら保して勝を全くするなり。

勝を見ること衆人の知る所に過ぎざるは、善の善なる者に非ざるなり。戦勝ちて天下善しといふは、善の善なる者に非ざるなり。故に秋毫を擧ぐるは多力と爲さず。日月を見るは明目と爲さず。雷霆を聞くは聰耳と爲さず。古の謂はゆる善く

易勝者也。故、善戰者之勝也、無智名、無勇功。故其戰勝不志。不志者、其所措必勝。勝已敗者也。故善戰者。立於不敗之地、而不失敵之敗也。是故、勝兵先勝而後求戰、敗兵先戰而後求勝。

善用兵者、修道而保法、故能爲勝敗之政。兵法、一曰度、二曰量、三曰數、四曰稱、五曰勝。地生度、度生量、量生數、數生稱、稱生勝。故勝兵若以鎰稱銖、敗兵若以銖稱鎰。勝者之戰也、若決積水於千仞之谿者、形也。

兵勢第五

孫子曰、凡治衆如治寡、分數是也。同

孫子原文譯文對照

戦ふ者勝つとは、勝ち易きに勝つ者なり。故に善く戦ふ者の勝つや、智名なく、勇功なし。故に其の戦勝志はず。志はざる者は、其の措く所必ず勝つ。已に敗れたるに勝つ者なり。故に善く戦ふ者は、不敗の地に立ちて、而して敵の敗を失はざるなり。是の故に、勝兵は先づ勝つて而る後に戦を求め、敗兵は先づ戦ひて而る後に勝を求む。

孫子曰く、凡そ衆を治むること寡を治むるが如くなるは、分

衆如闘寡、形名是也。三軍之衆、可使必受敵、而無敗者、奇正是也。兵之所加、如以假投卵者、虛實是也。

凡戰者、以正合、以奇勝。故善出奇者、無窮如天地、不竭如江河。終而復始、日月是也。死而復生、四時是也。

聲不過五、五色之變不可勝聽也。色不過五、五味之變不可勝嘗也。戰勢不過奇正、奇正之變不可勝窮也。奇正相生、如循環之無端。孰能窮之。

激水之疾、至於漂石者勢也。鷲鳥之疾、

數是れなり。衆を闘はすこと寡を闘はすが如くなるは、形名是れなり。三軍の衆、必ず敵を受けて而も敗なからしむべき者は、奇正是れなり。兵の加はる所、假を以て卵に投するが如くなる者は、虚實是れなり。

凡そ戰なるものは、正を以て合し、奇を以て勝つ。故に善く奇を出す者は、窮りなきこと天地の如く、竭きざること江河の如し。終りて復た始まるは、日月是れなり。死して復た生ずるは、四時是れなり。

聲は五に過ぎざれども、五聲の變は、聽くに勝ふべからざるなり。色は五に過ぎざれども、五色の變は、觀るに勝ふべからざるなり。味は五に過ぎざれども、五味の變は、嘗むるに勝ふべからざるなり。戰勢は奇正に過ぎざれども、奇正の變は、窮むるに勝ふべからざるなり。奇正の相生すること、循環の端なきが如し。孰か能く之を窮めん。

激水の疾き、石を漂はすに至るものは勢なり。鷲鳥の疾き、

至於毀折者節也。是故善戰者、其勢險、其節短。勢如張弩、節如發機。紛紛紜紜亂。而不可亂也。渾渾沌沌形圓、而不可敗也。

亂生於治、怯生於勇、弱生於強。治亂數也、勇怯勢也、強弱形也。故善動敵者、形之敵必從之、予之敵必取之。以利動之、以卒待之。

故善戰者、求之於勢、不責之於人。故能擇人、而任勢。任勢者、其戰人也、如轉木石。木石之性、安則靜、危則動、方則止、圓則行。故善戰人之勢、如轉圓石於千仞之山者勢也。

毀折に至るものは節なり。是故に善く戰ふ者は、其の勢險にして、其節短し。勢は弩を張るが如く、節は機を發するが如し。紛紛紜々として闘ひ亂れて、而も亂すべからざるなり。

渾々沌々として形圓かに、而して敗るべからざるなり。亂は治に生じ、怯は勇に生じ、弱は強に生ず。治亂は數なり、勇怯は勢なり、強弱は形なり。故に善く敵を動かす者は、之に形して敵必ず之に従ひ、之に予へて敵必ず之を取る。利を以て之を動かし、卒を以て之を待つ。

故に善く戰ふ者は、之を勢に求めて、之を人に責めず。故に能く人を選んで、而して勢に任ず。勢に任ずる者は、其の人を戰はしむるや、木石を轉すが如し。木石の性、安ければ則ち靜かに、危ければ則ち動き、方なれば則ち止まり、圓なれば則ち行く。故に善く人を戰はしむるの勢、圓石を千仞の山に轉すが如きものは勢なり。

虚 實 第 六

孫子兵法卷之六

孫子曰、凡先處戰地、而待敵者佚、後處戰地、而趨戰者勞。故善戰者、致人、而不致於人。能使敵人自至者、利之也。能使敵人不得至者、害之也。故敵佚能勞之、飽能飢之、安能動之、出其所以必趨、趨其所不意。

行千里、而不勞者、行於無人之地也。攻而必取者、攻其所不守也。守而必固者、守其所不攻也。故善攻者、敵不知其所守。善守者、敵不知其所攻。微乎微乎、至於無形、神乎神乎、至無聲。故能為敵之司命。

孫子曰く、凡そ先んじて戦地に處りて敵を待つ者は佚し、後れて戦地に處りて戦に趨く者は勞す。故に善く戦ふ者は、人を致して、而して人に致されず、能く敵人をして自ら至らしむるものは之を利すればなり。能く敵人をして至ることを得ざらしむるものは、之を害すればなり。故に敵佚すれば能く之を勞せしめ、飽けば能く之を飢えしめ、安ければ能く之を動かし、其の必ず趨く所に出で、其の意はざる所に趨く。行くこと千里にして、而も勞せざるものは、無人の地を行けばなり。攻めて必ず取るものは、其の守らざる所を攻むればなり。守りて必ず固きものは、其の攻めざる所をも守ればなり。故に善く攻むる者は、敵その守るべき所を知らず。善く守る者は、敵その攻むべき所を知らず。微なるかな微なるかな、形なきに至り、神なるかな神なるかな、聲なきに至る。

進而不可禦者、衝其虛也。退而不可追者、速而不可及也。故我欲戰、敵雖高壘深溝、不得不與我戰者、攻其所必救也。我不欲戰、雖畫地而守之、敵不得與我戰者、乖其所也。故形人、而我無形、則我專而敵分。我專為一、敵分為十。是以十攻其一也。則我衆而敵寡。能以衆擊寡、則吾之所與戰者約矣。

吾所與戰之地、不可知。不可知、則敵所備者多。敵所備者多、則吾所與戰者寡矣。故備前則後寡、備後則前寡、

孫子原文譯文對照

故に能く敵の司命たり。

進みて而も禦ぐべからざるものは、其の虚を衝けばなり。退いて而も追ふべからざるものは、速かにして及ぶべからざればなり。故に我戦はんと欲すれば、敵、壘を高くし溝を深くすと雖も我と戦はざるを得ざるものは、其の必ず救ふ所を攻むればなり。我戦ふことを欲せざれば、地に畫して之を守るると雖も、敵、我と戦ふことを得ざるものは、其の之く所に乖けばなり。故に人に形せしめて而して我に形なければ、則ち我は専らにして、而して敵は分る。我は専らにして一となり、敵は分れて十となる。是れ十を以て其の一を攻むるなり。則ち我は衆にして敵は寡なり。能く衆を以て寡を撃てば、則ち吾の與に戦ふ所のもの約なり。

吾の與に戦ふ所の地、知るべからず。知るべからざれば、則ち敵の備ふる所のもの多し。敵の備ふる所のもの多ければ、則ち吾の與に戦ふ所のもの寡し。故に、前に備ふれば則ち後

備_レ左則右寡、備_レ右則左寡。無_レ所_レ不_レ備、則無_レ所_レ不_レ寡。寡者備_レ人者也。衆者使_レ人備_レ己者也。

故知_レ戰之地、知_レ戰之日、則可_レ千里而會戰。不_レ知_レ戰地、不_レ知_レ戰日、則左不_レ能_レ救_レ右、右不_レ能_レ救_レ左、前不_レ能_レ救_レ後、後不_レ能_レ救_レ前。而況遠者數十里、近者數里乎。以_レ吾度_レ之、越人之兵雖_レ多、亦奚益_レ於勝敗_レ哉。故曰、勝可_レ爲也。敵雖_レ衆、可_レ使_レ無_レ闘。故、策_レ之而知_レ得失之計、作_レ之而知_レ動靜之理、形_レ之而知_レ死生之地、角_レ之而知_レ有餘不足之處。故、形_レ兵之極、至於無_レ形。無_レ形則深間不_レ能_レ窺、智者不_レ能_レ謀。因_レ

形而措_レ勝於衆。衆不_レ能_レ知。人皆、知_レ我所以_レ勝_レ之形、而莫_レ知_レ吾所以_レ以_レ制_レ勝_レ之形。故其戰勝不_レ復、而應_レ形於無窮。夫兵形象_レ水。水之形避_レ高而趨_レ下。兵之形避_レ實而擊_レ虛。水因地而制_レ流。兵因_レ敵而制_レ勝。故兵無_レ常勢、水無_レ常形。能因_レ敵變化而取_レ勝者、謂_レ之神。故五行無_レ常勝、四時無_レ常位、日有_レ短長、月有_レ死生。

軍爭第七

孫子曰、凡用_レ兵之法、將受_レ命於君、合_レ軍聚_レ衆、交和而舍。莫_レ難於軍爭。軍爭之難者、以_レ迂爲_レ直、以_レ患爲_レ利。故迂_レ其途、而誘_レ之以_レ利、後_レ人發先_レ人至。此知_レ迂直之計_レ者也。

孫子原文譯文對照

一七六
に寡く、後に備ふれば則ち前に寡く、左に備ふれば則ち右に寡く、右に備ふれば則ち左に寡し。備へざる所なければ、則ち寡からざる所なし。寡きものは人に備ふる者なり。衆きものは人をして己に備へしむる者なり。

故に戰の地を知り戰の日を知れば、千里にして會戰すべし。戰地を知らず、戰日を知らざれば則ち、左、右を救ふこと能はず、右、左を救ふこと能はず、前、後を救ふこと能はず、後、前を救ふこと能はず。而るを況や遠き者數十里、近き者數里なるをや。吾を以て之を度るに、越人の兵多しと雖も、亦奚ぞ勝敗に益あらんや。故に曰く、勝は爲すべきなり、敵は衆しと雖も闘ふことなからしむべしと。故に、之を策して得失の計を知り、之を作して動靜の理を知り、之に形して死生の地を知り、之に角して有餘不足の處を知る。故に、兵を形するの極は、形なきに至る。形なければ則ち深間も窺ふこと能はず、智者も謀ること能はず。形に因

て勝を衆に措く。衆知ること能はず。人皆、我の勝ちし所以の形を知れども、而も吾の勝を制せし所以の形を知ることなし。故に其の戰勝復びせず、而して形に無窮に應ず。夫れ兵の形は水に象る。水の形は高きを避けて下きに趨く。兵の形は實を避けて虚を撃つ。水は地に因て流れを制す。兵は敵に因て勝を制す。故に兵に常勢なく水に常形なし。能く敵に因て變化して勝を取る者、之を神と謂ふ。故に五行に常勝なく、四時に常位なく、日に短長あり、月に死生あり。

孫子曰く、凡そ兵を用ふるの法は、將、命を君に受け、軍を合せ衆を聚め、交和して舍す。軍争より難きはなし。軍争の難きは迂を以て直となし、患を以て利と爲すにあり。故に、其の途を迂にして之を誘ふに利を以てし、人に後れて發し人に先だちて至る。此れ迂直の計を知る者なり。

故軍爭爲利、軍爭爲危。舉軍而爭利則不及、委軍而爭利則輜重捐。是故卷甲而趨、日夜不處、倍道兼行、百里而爭利、則擒三將軍、勁者先、疲者後、其法十而一至。五十里而爭利、則蹶上將軍、其法半至。二十里而爭利、則三分之二至。是故、軍無輜重則亡、無糧食則亡、無委積則亡、

故不知諸侯之謀者、不能豫交。不知山林、險阻、沮澤之形者、不能行軍。不用鄉導者、不能得地利。故兵以詐立、以利動、以分合爲變者也。故、其疾如風、其徐如林、侵掠如火、不動如山、難知如陰、動如雷霆。掠鄉分衆、廓地分利、懸權而動。先知迂直之計者勝。此軍爭之法也。

故に軍争は利たり、軍争は危たり。軍を擧げて利を争へば則ち及ばず、軍を委して利を争へば則ち輜重捐る。是故に、甲を卷きて趨り、日夜處らず、道を倍して兼行し、百里にして利を争へば、則ち三將軍を擒にせられ、勁き者先んじ、疲れたる者後れ、其の法十が一にして至る。五十里にして利を争へば、則ち上將軍を蹶かしめ、其の法半ば至る。二十里にして利を争へば則ち三分の二至る。是故に、軍に輜重なければ則ち亡び、糧食なければ則ち亡び、委積なければ則ち亡ぶ。

故に、諸侯の謀を知らざる者は豫め交はること能はず。山林險阻沮澤の形を知らざる者は、軍を行ること能はず。郷導を用ひざる者は、地の利を得ること能はず。故に兵は詐を以て立ち、利を以て動き、分合を以て變を爲すものなり。故に、其の疾きことは風の如く、其の徐なることは林の如く、侵掠することは火の如く、動かざることは山の如く、知り難きことは陰の如く、動くことは雷の震ふが如し。郷を掠めては衆

軍政曰、言不相聞、故爲金鼓。視不相見、故爲旌旗。夫金鼓旌旗者、所以一人之耳目也。人既專一、則勇者不得獨進、怯者不得獨退。此用衆之法也。故夜戰多火鼓、晝戰多旌旗、所以變人之耳目也。故三軍可奪氣、將軍可奪心。是故、朝氣銳、晝氣惰、暮氣歸。故善用兵者避其銳氣、擊其惰歸。此治氣者也。以治待亂、以靜待譁。此治心者也。以近待遠、以佚待勞、以飽待饑。此治力者也。無邀正正之旗、勿擊堂堂之陣。此治變者也。

に分ち、地を靡きては利を分ち、權を懸けて動く。先づ迂直の計を知る者は勝つ。此れ軍争の法なり。

軍政に曰く、言ひて相聞えず、故に金鼓を爲る、視て相見えず、故に旌旗を爲ると。夫れ金鼓旌旗は人の耳目を一にする所以なり。人既に專一なれば、則ち勇者も獨り進むを得ず、怯者も獨り退くを得ず。此れ衆を用ふるの法なり。故に夜戦に火鼓を多くし、晝戦に旌旗を多くするは、人の耳目を變ずる所以なり。故に、三軍、氣を奪ふべく、將軍心を奪ふべし。是故に、朝の氣は鋭く、晝の氣は惰り、暮の氣は歸る。故に善く兵を用ふる者は、其の銳氣を避けて、其の惰歸を撃つ。

此れ氣を治むる者なり。治を以て亂を待ち、靜を以て譁を待つ。此れ心を治むる者なり。近を以て遠を待ち、佚を以て勞を待ち、飽を以て饑を待つ。此れ力を治むる者なり。正々の旗を邀ふるなかれ、堂々の陣を撃つなかれ。此れ變を治むる者なり。

故、用兵之法、高陵勿向。背丘勿逆。背北勿從。銳卒勿攻。餌兵勿食。歸師勿遏。圍師必闕。窮寇勿追。此用兵之法也。

九變 第八

孫子曰、凡用兵之法、將受命於君、合軍聚衆。圯地無舍。衢地合交。絕地無留。圍地則謀。死地則戰。塗有所不由。軍有所不擊。城有所不攻。地有所不爭。君命有所不受。故、將通於九變之利者、知用兵矣。將不通於九變之利者、雖知地形、不能得地之利。治兵不知九變之術、雖知五利、不能得人之用矣。

故に兵を用ふるの法、高陵には向ふ勿れ。背丘には逆ふ勿れ。背北には從ふ勿れ。銳卒は攻むる勿れ。餌兵は食する勿れ。歸師は遏むる勿れ。圍師は必ず闕け。窮寇には追る勿れ。此れ用兵の法なり。

孫子曰く、凡そ兵を用ふるの法は、將、命を君に受け軍を合せ衆を聚む。圯地には舍することなかれ。衢地には交り合す。絶地には留まることなかれ。圍地には則ち謀り、死地には則ち戦ふ。塗も由らざる所あり。軍も撃たざる所あり。城も攻めざる所あり。地も争はざる所あり。君命も受けざる所あり。故に、將、九變の利に通ずる者は、兵を用ふることを知る。將、九變の利に通ぜざる者は、地形を知ると雖も、地の利を得ること能はず。兵を治むるに九變の術を知らざれば、五利を知ると雖も、人の用を得ること能はず。

是故、智者之慮必雜於利害。雜於利、而務可信也。雜於害、而患可解也。是故、屈諸侯者以害、役諸侯者以業、趨諸侯者以利。故用兵之法、無恃其不來、恃吾有以待也。無恃其不攻、恃吾有所不可攻也。

故、將有五危。必死可殺也。必生可虜也。忿速可侮也。廉潔可辱也。愛民可煩也。凡此五者將之過也、用兵之災也。覆軍殺將、必以五危。不可不察也。

行軍 第九

孫子曰、凡處軍相敵、絕山依谷、視

孫子原文譯文對照

是故に、智者の慮は必ず利害に雜はる。利に雜へて、而して、務め、信ぶべきなり。害に雜へて、而して、患ひ、解くべきなり。是故に、諸侯を屈せしむる者は害を以てし、諸侯を役する者は業を以てし、諸侯を趨かしむる者は利を以てす。故に兵を用ふるの法は、其の來らざるを恃むことなく、吾が以て待つあるを恃む。其の攻めざるを恃むことなく、吾が攻むべからざる所あるを恃む。故に將に五危あり。必死は殺すべきなり。必生は虜にすべきなり。忿速は侮るべきなり。廉潔は辱むべきなり。民を愛するは煩はすべきなり。凡そ此の五つのは將の過なり、兵を用ふるの災なり。軍を覆し將を殺すは、必ず五危を以てす。察せざるべからざるなり。

孫子曰く、凡そ軍を處き敵を相するには、山を絶えて谷に依

生處高、戰隆無登。此處山之軍也。絶水必遠水。客絶水而來、勿迎之於水内。令半濟而擊之利。欲戰者、無附水而迎客。視生處高、無迎水流。此處水上之軍也。絶斥澤、惟亟去。無留。若交軍於斥澤之中、必依水草、而背衆樹。此處斥澤之軍也。平陸處易、右背高、前死後生。此處平陸之軍也。凡此四軍之利、黃帝之所以勝四帝也。

凡軍、好高而惡下、貴陽而賤陰。養生而處實。軍無百疾。是謂必勝。丘陵、隄防必處其陽、而右背之。此兵之利、地之助也。上雨水沫至、欲涉者待其定也。凡地、

り、生を視て高きに處り、隆に戰ふに登ることなけれ。此れ山に處るの軍なり。水を絶りては必ず水に遠ざかれ。客、水を絶りて來らば、之を水内に迎ふることなけれ。半ば濟らしめて之を撃てば利あり。戰はんと欲する者は、水に附いて客を迎ふるなけれ。生を視て高きに處り、水流を迎ふることなけれ。此れ水上に處るの軍なり。斥澤を絶るには、惟亟かに去れ。留まるなけれ。若し軍を斥澤の中に交へば必ず水草に依り、而して衆樹を背にせよ。此れ斥澤に處るの軍なり。平陸には易に處り、高きを右背にし、死を前にし生を後にす。此れ平陸に處るの軍なり。凡そ此の四軍の利は、黃帝の四帝に勝ちし所以なり。

凡そ軍、高きを好んで下きを惡み、陽を貴んで陰を賤しむ。生を養ひて實に處る。軍に百疾なし。是を必勝といふ。丘陵、堤防は必ず其の陽に處り、而して之を右背にす。此れ兵の利、地の助なり。上雨ふりて水沫至らば、涉らんと欲する者は其

有絶澗・天井・天牢・天羅・天陷・天隙、必亟去之、勿近也。吾遠之、敵近之、吾迎之、敵背之。軍行有險阻・潢井・葭葦・山林・蘄薈、必謹覆索之。此伏姦之所、藏處也。

敵近而靜者、恃其險也。遠而挑戰者、欲人之進也。其所居易者、利也。衆樹動者、來也。衆草多障者、疑也。鳥起者、伏也。獸駭者、覆也。塵高而銳者、車來也。卑而廣者、徒來也。散而條達者、樵採也。少而往來者、營軍也。辭卑而益備者、進也。辭詭而強進驕者、退也。輕車先出居其側者、陣也。無約而請和者、謀也。奔走而陣兵車者、期也。半進半退者、誘也。仗而立者、飢也。汲而先飲者、渴也。見利

の定まるを待て。凡そ地に、絶澗・天井・天牢・天羅・天陷・天隙あらば、必ず亟かに之を去り、近づくなけれ。吾は之を遠ざけ、敵には之に近づかしめ、吾は之を迎へ、敵には之に背かしめよ。軍行に、險阻・潢井・葭葦・山林・蘄薈あらば、必ず謹みて之を覆索せよ。此れ伏姦の藏る所の處なり。

敵近くして而も靜かなる者は、其の險を恃むなり。遠くして而も戰を挑む者は、人の進まんことを欲するなり。其の居る所易なる者は、利あるなり。衆樹動くものは、來るなり。衆草障多きものは、疑はしむるなり。鳥起つものは伏あるなり。獸駭くものは、覆ふなり。塵高くして銳きものは、車來るなり。卑くして廣きものは、徒來るなり。散じて條達するものは、樵採するなり。少なくて往來するものは、軍を營するなり。辭卑くして而も備を益すものは、進まんとするなり。辭詭にして強く、進み驕くるものは、退かんとするなり。輕車先づ出でて其の側に居るものは、陣せんとするなり。約な

而不進者、勞也。鳥集、虛也。夜呼者、恐也。軍擾者、將不重也。旌旗動者、亂也。吏怒者、倦也。殺馬肉食者、軍無糧也。懸瓶不返、其舍者窮寇也。諄諄翁翁、徐言入者、失衆也。數賞者、窘也。數罰者、困也。先暴而後畏、其衆者、不精之至也。來委謝者、欲休息也。兵怒而相迎、久而不合、又不相去、必謹察之。

兵非益多也。惟無武進。足以併力料

くして和を請ふものは、謀るなり。奔走して兵車を陣するものは期するなり。半ば進み半ば退くものは、誘ふなり。仗して立つものは飢ゑたるなり。汲みて先づ飲むものは渴せるなり。利を見て而も進まざるものは勞せるなり。鳥集まるものは、虚しきなり。夜呼ぶものは恐るなり。軍擾るものは將重からざるなり。旌旗動くものは、亂るなり。吏怒るものは、倦みたるなり。馬を殺して肉食するものは、軍に糧なきなり。瓶を懸けて其の舍に返らざるものは、窮寇なり。諄々翁々、徐言入々たるものは、衆を失へるなり。數々賞するものは、窘せるなり。數々罰するものは、困せるなり。先づ暴にして後に其の衆を畏るものは、不精の至なり。來り委して謝するものは、休息せんと欲するなり。兵怒りて相迎へ、久しうして合せず、又相去らざるは、必ず謹みて之を察せよ。

兵は多きを益とするに非ざるなり。惟武進するなかれ。以て

敵。取人而已。夫惟無慮而易敵者、必擒於人。卒未親附而罰之、則不服。不服則難用也。卒已親附、而罰不行、則不可用也。故、令之以文、齊之以武、是謂必取。令素行、以教其民、則民服。令不素行、以教其民、則民不服。令素行者、與衆相得也。

地形第十

孫子曰、地形有通者、有挂者、有支者、有隘者、有險者、有遠者。我可以往、彼可以來、曰通。通形者、先居高陽、利糧道、以戰則利。可以往、難以返、曰挂。挂形

力を併せ敵を料るに足る。人に取らんのみ。夫れ惟慮なくして敵を易る者は、必ず人に擒にせらる。卒未だ親附せざるに之を罰すれば則ち服せず。服せざれば則ち用ひがたきなり。卒已に親附して、而も罰行はざるときは、則ち用ふべからざるなり。故に、之を令するに文を以てし、之を齊ふるに武を以てす、是を必取といふ。令素より行はれ、以て其の民を教ふれば、則ち民服す。令素より行はれず、以て其の民を教ふれば、則ち民服せず。令素より行はる者は、衆と相得るなり。

孫子曰く、地形に、通なるものあり、挂なるものあり、支なるものあり、隘なるものあり、險なるものあり、遠なるものあり。我以て往くべく、彼以て來るべきを通といふ。通形なるものは、先づ高陽に居り、糧道を利し、以て戦へば則ち利

者、敵無備、出而勝之。敵若有備、出而不勝、難以返、不利。我出而不利、彼出而不利、曰支。支形者、敵雖利我、我無出也。引而去之、令敵半出、而擊之利。隘形者、我先居之、必盈之以待敵。若敵先居之盈而勿從、不盈而從之。險形者、我先居之、必居高陽以待敵、若敵先居之、引而去之。勿從也。遠形者、勢均難以挑戰。戰而不利。凡此六者、地之道也。將之至任、不可不察也。

故、兵有走者、有弛者、有陷者、有崩者、有亂者、有北者。凡此六者、非天地之災、

あり。以て往くべく、以て返りがたきを挂といふ。挂形なるものは、敵、備なければ出でて之に勝つ。敵若し備あらば、出でて勝たざらん。以て返りがたくして、不利なり。我出でて利あらず、彼出でて利あらざるを支といふ。支形なるものは、敵我に利すと雖も、我出づるなかれ、引きて之を去り、敵をして半ば出でてしめて之を撃てば利あり。隘形なるものは我先づ之に居らば、必ず之を盈して以て敵を待て。若し敵先づ之に居らば、盈つれば而ち從ふこと勿れ。盈たざれば而ち之に從へ。險形なるものは、我先づ之に居らば、必ず高陽に居て、以て敵を待ち、若し敵先づ之に居らば引いて之を去れ。從ふこと勿れ。遠形なるものは、勢均しければ以て挑戰すること難し。戰ひて利あらず。凡そ此の六つのものは、地の道なり。將の至任、察せざるべからざるなり。

將之過也。夫勢均、以一擊十、曰走。卒強吏弱、曰弛。吏強卒弱、曰陷。大吏怒而不服、遇敵愾而自戰、將不知其能、曰崩。將弱不嚴、教道不明、吏卒無常、陣兵縱橫、曰亂。將不能料敵、以少合衆、以弱擊強、兵無選鋒、曰北。凡此六者、敗之道也。將之至任、不可不察也。

夫地形者、兵之助也。料敵制勝、計險阨、遠近、上將之道也。知此而用戰者必勝、不知此而用戰者必敗。故戰道必勝、主曰無戰、必戰可也。戰道不勝、主曰必戰、無戰可也。

凡そ此の六つのものは、天地の災にあらず、將の過なり。夫れ勢均しきに、一を以て十を撃つは、曰く走。卒強く吏弱きは、曰く弛。吏強く卒弱きは、曰く陷。大吏怒りて而も服せず、敵に遇へば愾みて自ら戰ふ、將その能を知らず、曰く崩。將弱くして嚴ならず、教道明かならず、吏卒常なく、兵を陣して縱橫なる、曰く亂。將敵を料る能はず、少を以て衆に合し、弱を以て強を撃ち、兵に選鋒なし、曰く北。凡そ此の六つのものは、敗の道なり。將の至任、察せざるべからざるなり。

夫れ地形なるものは兵の助なり。敵を料りて勝を制し、險阨遠近を計るは、上將の道なり。此を知つて用て戰ふ者は必ず勝ち、此を知らずして用て戰ふものは必ず敗る。故に戰の道、必ず勝つべくば、主戰ふなかれといふとも、必ず戰ひて可なり。戰の道勝たざるべくば、主戰へといふとも戰ふことなくして可なり。

故、進不_レ求_レ名、退不_レ避_レ罪、唯民是保、而利_ニ於_レ主_ニ國_ノ之寶也。視_レ卒如_ニ嬰兒_一、故可_ニ與_レ之赴_ニ深溪_一。視_レ卒如_ニ愛子_一、故可_ニ與_レ之俱死。厚而不能_レ使、愛而不能_レ令、亂而不能_レ治、譬若_ニ驕子_一。不_レ可_レ用也。知_ニ吾卒之可_ニ以擊_レ、而不知_レ敵之不可_レ擊、勝之半也。知_ニ敵之可_レ擊、而不知_レ吾卒之不_レ可_レ以擊、勝之半也。知_ニ敵之可_レ擊、知_ニ吾卒之可_レ以擊、而不知_レ地形之不可_レ以戰、勝之半也。故知_レ兵者、動而不_レ迷、學而不_レ窮。故曰、知_レ彼知_レ己、勝乃不_レ殆。知_レ天知_レ地、勝乃可_レ全。

故に、進みて名を求めず退きて罪を避けず、唯民を是れ保し而して主に利あるは、國の寶なり。卒を視ること嬰兒の如くす、故に之とともに深溪にも赴くべし。卒を視ること愛子の如くす、故に之とともに俱に死すべし。厚くして使ふこと能はず、愛して令すること能はず、亂れて治むること能はずんば、譬へば驕子の若し。用ふべからざるなり。吾が卒の以て撃つべきを知りて、而して敵の撃つべからざるを知らざるは、勝の半ばなり。敵の撃つべきを知りて、而して吾が卒の以て撃つべからざるを知らざるも、勝の半ばなり。敵の撃つべきを知り、吾が卒の以て撃つべきを知り、而して地形の以て戦ふべからざるを知らざるも、勝の半ばなり。故に兵を知る者は、動きて迷はず、學けて窮せず。故に曰く、彼を知り己を知らば勝乃ち殆からず。天を知り地を知らば勝乃ち全うすべし。

九地第十一

孫子曰、用_レ兵之法、有_ニ散地_一、有_ニ輕地_一、有_ニ爭地_一、有_ニ交地_一、有_ニ衝地_一、有_ニ重地_一、有_ニ圯地_一、有_ニ圍地_一、有_ニ死地_一。諸侯自戰_ニ其地_一、爲_ニ散地_一。入_ニ人_ノ之地_一、而不_レ深者、爲_ニ輕地_一。我得則利、彼得亦利者爲_ニ爭地_一。我可_ニ以往_レ、彼可_ニ以來_レ者、爲_ニ交地_一。諸侯之地三屬、先至而得_ニ天下之衆者_一、爲_ニ衝地_一。入_ニ人_ノ之地_一、深、背_ニ城邑_一多者、爲_ニ重地_一。行_ニ山林_一、險阻、沮澤、凡難_レ行之道_一者、爲_ニ圯地_一。所_ニ由入_レ者險、所_ニ從歸_レ者迂、彼寡可_ニ以擊_レ、吾之衆_一者、爲_ニ圍地_一。疾戰則存、不_ニ疾戰_一則亡者、爲_ニ死地_一。是故、散地則無_レ戰、輕地則無_レ止、爭地則無_レ攻、交地則無_レ繼、衝地則合_レ交。

孫子原文譯文對照

孫子曰く、兵を用ふるの法、散地あり、輕地あり、爭地あり、交地あり、衝地あり、重地あり、圯地あり、圍地あり、死地あり。諸侯自ら其の地に戦ふを、散地と爲す。人の地に入りて而も深からざるものを輕地と爲す。我得れば則ち利あり、彼得るも亦利あるものを爭地と爲す。我以て往くべく、彼以て來るべきものを交地と爲す。諸侯の地三屬し、先づ至りて天下の衆を得るものを、衝地と爲す、人の地に入ること深く、城邑を背にすること多きものを重地と爲す。山林、險阻、沮澤、凡そ行きがたきの道を行くものを、圯地と爲す。由つて入る所のもの險く、從つて歸る所のもの迂にして、彼の寡、以て吾の衆を撃つべきものを、圍地と爲す。疾く戦へば則ち存し、疾く戦はざれば則ち亡するものを死地と爲す。是故に、散地には則ち戦ふことなかれ。輕地には則ち止まることな